

# 女子学生文化の現代的位相

——女性内分化と女性性の両義性の視点から——

東京大学教育社会学研究室 越 智 康 詞  
国立教育研究所研究員 菊 地 栄 治  
武蔵野女子大学専任 加 藤 隆 雄  
東京大学教育社会学研究室 吉 原 恵 子

## Differentiations and Ambivalence of Femininity in the Women's Student Culture

Yasushi OCHI/Eiji KIKUCHI/Takao KATO/Keiko YOSHIHARA

Many gender studies are based on the concept of patriarchy which stresses the dichotomous distinction between women and men and which focuses on men's domination over women. But, in reality, women cannot be understood by the single category of "women" which is implicitly presupposed in the theory of patriarchy. They consist of multiple and differentiated layers. And the mechanisms through which femininity and domesticity are produced and reproduced should be reconsidered from the point of both feminine culture and the *pratique* or strategic actions of women.

In this paper, the data from the survey of the women undergraduate students (for details, see Section I) are analyzed both quantitatively and qualitatively. In Section II, quantitative data are analyzed from the viewpoints of feminine socialization and housework practices (chapter A), feminine culture of consumption, domesticity and object-favoritism (chapter B), relationships between marital and professional perspectives (chapter C) and "conservatization" by two types of feminine strategic actions (chapter D). In Section III, the qualitative data (free description) are analyzed concerning the future expectation (chapter A), advantageous and disadvantageous experiences of being women (chapter B), and transformation of notions about males and marriage (chapter C). The perspective of "differentiation and ambivalence of femininity" is effective to analyze the (post-) modern gender relations.

### 目 次

#### I. はじめに

- A. 問題の所在
- B. 調査の概要

#### II. 〈女性内分化〉と「家庭性」形成の現代的メカニズム

- A. 〈女性内分化〉のダイナミクス  
——社会化機関としての家庭・学校——
- B. 〈女性文化〉の構造  
——消費性・家庭性・オブジェ愛好——
- C. 職業選択における三つのロジック  
——私的領域と公的領域の境界線をめぐって——

#### D. 階層・教育と〈女性内分化〉

——二つの女性性を通じた「保守化」メカニズム——

#### III. 自由記述を通して見たジェンダー構造

- A. 将来の夢の分析
- B. 損／得意識からみたジェンダー構造
- C. ジェンダー文化の変容と両義性

#### IV. 結びにかえて

## I. はじめに

### A. 問題の所在

ジェンダーの社会学,あるいはフェミニズム的な実践にとって,女性の立場の被抑圧性,女らしさ/男らしさの区別の恣意性・暴力性を解明・暴露することが重要であることは言うまでもない。しかし,(男性)社会の批判を第一義的な目的として,もっぱら支配/従属,権力の有/無という区別から客観主義的にジェンダー関係の構造を分析しようとする,自ら視点を狭めてしまうことにもなりかねない。というのも,この区別へのこだわりは,男女の二分法に分析の可能性を制限し(女性内部の多様性の抑圧),ジェンダー関係の複雑さや女性であることの両義性に目を覆うことになるからである。

こうした形での分析視角を下支えする一種のパラダイムとなってきたのが「家父長制」という概念=メタファーである。この概念=メタファーは,男性/女性間の非対称性を,自然主義的な思考から問題領域として突起させ,さらには女性抑圧を階級抑圧に派生する二次的な地位から,独自の問題領域として確立する上で大きな役割を演じてきた。つまり,ジェンダー関係の構造をジェンダー内在的に分析するための基礎概念として機能してきたのである。<sup>1)</sup>だが,この概念が大きな解明力を有することができたのは,性別役割分業,女・男らしさの文化的イメージ,セクシュアリティといったジェンダー関係の諸構造が「家父長制的家族関係=再生産関係」を中心として,一貫性を持ったものとして成立していたからだということをおぼろげに忘れるべきでない。<sup>2)</sup>しかし,現代社会は,資本制も成熟段階に入り,消費領域を媒介として生産領域と文化領域の間の相互乗り入れが進行し,また,機能によるシステム分化の進行によって特権的な中心を失ってしまった,そういう社会である。こうした社会の中において,ジェンダー関係の諸構造だけが安定的・統合的に維持されるということとはありえない。たとえば,一方で能力に応じた処遇を原理とする平等コードに支配された教育の領域が拡大してきたかと思えば,<sup>3)</sup>逆に,商業活動の中で利用されたり,女性自身によって演じられ・楽しまれる文化的要素として“女性らしさ”のイメージやセクシュアリティを殊更強調する消費・都市・マスメディアの領域もますます発展してきている。従って,“現代のジェンダー秩序を記述する”という課題は言うに及ばず,“女性が不利な立場に置かれつつけているのはなぜか”というフェミニズム的な課題を探求する場合においてさえ,原因を結果の中にすでに予定してしまうこの統一体のメタファー,あるいはある種の女性の意識

や実践を虚偽なるものとして捨て去ってしまうこのパラダイムでは,十分な解明を期待することはできないのである。<sup>4)</sup>

こうして私たちは,家父長制概念のもたらしてくれた遺産を尊重しながらも,ここから二重の意味で方向転換を図る必要がある。ひとつは,女性にとって不利な結果が産出される現象を,ある一つの究極の原因や本質に帰責する方向(実はこれはトートロジーである)から,“いかにして”当の状況が産出されるのかを記述する方向,つまりシステム関連を明らかにするという方向への転換である。そして,もうひとつは,女性自身の行為や意識を構造やシステムの産物としてとらえる方向から,構造やシステムと主体的に関係する実践・プロセスとしてとらえる方向への転換である。<sup>5)</sup>

本稿の課題は,こうした問題意識から,女子学生の文化・意識を通して現代日本におけるジェンダー関係の現状を再検討することである。対象として女子大学生(比較のため男子学生も含まれる)を選んだのは,大学時代は①高校までとは異なり女性としての人生選択によりリアルに直面し,かつまた多様なジェンダー文化と出会う時期にあたること,②しかも,この時期はまだライフコースを限定する前であり,選択しつつある過渡期の意識の自由度や葛藤をまさにその現場でとらえることができると思われること,③そして,これは上の前提自体を問い直すことにもつながるが,教育の論理の支配する社会から外部社会へ巣立っていく移行期の意識を見ることで,ジェンダーと教育との関係をとらえ直すことができると思われるからである。その際,われわれの分析の中心のテーマは,いかなる社会的条件のもとで,そしていかなる論理のもとで女子学生は「保守的」で「家庭志向的」な選択を行うのか,を明らかにすることである。この点に注目する理由は,もちろん一方では,こうした「保守的」な選択が,性別役割分業規範を維持することに貢献し,結果として女性に不利に作用しているという判断があるからであるが,他方で,そうした結果へと至る女性の選択プロセスは決して単に支配や抑圧の産物ではないことを示し,さらには,その選択の論理の中から(男性)社会を相対化するといった積極的な可能性を探るためでもある。

この課題は二つのセクションに分けて段階的に行われる。Ⅱ章では,いかにして「性別役割分業」観を保持し,「専業主婦」を志願する女性が生成されるのか,という問いを出発点とし,こうした傾向が生み出される要因を家庭や学校での経験(A節),女性文化の内在的特性(B節),女性の職業選択の論理との関係(C節),経済的豊

かさや学校でのパフォーマンスという二つのジェンダー外変数との関連（D節）といった様々な角度から分析する。だが、ここでの重点は、女性を通じず女性の背後で作用する力を強調する家父長制的・客観主義的理論ではとらえ切れない部分、すなわち女性文化の独自性や女性自身の選択行為＝実践をも視野に含めて、これを記述することにある。こうした方法を取ることで二つの重要な事実が見えてくる。ひとつは、「性別役割分業観＝家庭性」（以下「分業観＝家庭性」と表記）の内実や、「分業観＝家庭性」が生み出される際の形成原理の「差異」（変化や多様性）である。たとえ表面的には同じ事柄・行為の選択であっても、これにどのような意味を与え、何を期待するののかによって、また、これがどのような社会的文脈の中での行為なのかによって、その選択行為のもつ意味は大きく異なっているのである。もうひとつは、女性内に構造的に形成された「分化」である。カテゴリーとしての女性に外からふりかかる力を説明原理とすると、あらゆる女性があらゆる側面にわたって女性性の規範を同じように受容しているかの印象を与えるが、これは大きな誤りである。後で見るように、現代日本女性の「分業観＝家庭性」の選択傾向を示す統計データは、女性内分化の視点を媒介することで説明されるべきものである。つまり、全面的・一様に「分業＝家庭性」が維持されているというよりも、「分業」を否定的・拘束的に受け止める層（ケース）が現れてきた一方で、逆にこれを積極的に受け取り、戦略的な資源として利用しようとする層（ケース）も現れてきている、というように。

ところで、女性自身の選択の論理を浮き彫りにするには、女性がジェンダー構造に対しどのように実践的に関与しているのかを明らかにする必要があるが、そのためには、あらかじめカテゴリーを設定し、その中で分析を実行する統計的手法では限界がある。女性自身のジェンダー関係に関する「自由記述」の分析を通して、ジェンダー世界の多様性や両価性についての理解を深めることがⅢ章の課題である。この「自由記述」の分析においては、たとえば個々の女性が結婚や仕事や男女関係をどのように観察・解釈・評価し、また、これとどのような関係をとろうとしているのかといった女性自身の内的論理を通して、ジェンダー関係の諸構造が再構成されることになる。こうした方法を取ることににより、ある意味でⅡ章で設定した問題構成や概念そのものが再検討に付されることにもなるだろう。

以上、Ⅱ章とⅢ章の分析を合わせて浮上するのは、女性性の両義性あるいは女性であることのパラドックスである。個々人にとって合理的な行動も集合的には非合理

なものとなりうる、ということは社会学の常識であるが、本稿においても、たとえば次のような「つながり」が示唆されるだろう。すなわち、一元的な価値が支配するシステム（学校化社会・会社主義）が強固であるがゆえに、個々人がそのシステムから溢れ出る価値・目標を持つこと、さらには多様な社会的文脈上の要請に応じて選び取る価値・目標を変異させる可能性に開かれていることが、かえって自らの将来や自らの属するカテゴリーの地位を下げることに結果する、といった逆説的な「つながり」が<sup>6)</sup>

（越智康詞）

## B. 調査の概要

本報告で分析するデータは、東京都およびその近県の四年制大学・短期大学を対象とする調査によって収集された。調査の概要を以下に記す。

### 1 実施時期・方法

平成3（1991）年6～7月に、集合自記式の質問紙調査（一部持ち帰り方式）を実施し、あわせて関連資料の収集を行なった。

### 2 調査対象の選定

選抜性・設置主体・共学／別学の基準にもとづいて、関東圏の四年制大学・短期大学を6グループに層化した。その上で、各層から2校ずつ（一部1校）を調査対象校として選定した。文科系学科の1・2年生（一部3・4年生を含む）を中心に調査を実施した結果、合計999名の有効サンプルが得られた。

### 3 対象校の特徴

各大学の特徴とサンプル構成は、表1の通りである。なお、さらに詳細な分析については、調査報告書（菊池栄治・加藤隆雄・越智康詞・吉原恵子『女子学生文化にみるジェンダーの現代的位相』1993年3月）を参照していただきたい。（特に第Ⅲ章）

（菊池栄治）

〔付記〕 お忙しいなか調査にご協力いただいた先生方ならびに学生の皆さんに心からお礼を申し上げます。また、調査経費の一部を負担していただいた東京大学教育学部教育社会学研究室の先生方、そして、調査票作成時に忌憚のないご助言をいただいた研究会（「ウーマン研」）の皆さんに対して、記して謝意を表する次第です。

## Ⅱ. 〈女性内分化〉と「家庭性」形成の現代的メカニズム

近代社会はひとつの歴史的転換点を迎え、女性のライフスタイル・価値観やジェンダー関係も変動期にさしか

表1 調査対象校の特徴とサンプル構成

	A大	B大	C大	D大	E大	F大	G大	H大	I大	J大	K大
①四大 / 短大	四大	四大	四大	四大	四大	四大	四大	四大	四大	短大	短大
②共学 / 別学	共学	共学	別学	別学	共学	共学	共学	別学	別学	別学	別学
③設置主体別	私立	私立	国立	私立	国立	私立	私立	私立	私立	私立	私立
④有効サンプル数	99	82	40	55	95	96	56	156	46	83	191
⑤男子学生比率*	27.3	26.8	—	—	30.5	25.0	42.9	—	—	—	—
⑥出身高校大学進学率 <sup>※</sup>	81.3	76.9	85.5	83.6	76.1	71.4	72.3	64.1	53.9	67.2	29.1

\*サンプル中に占める男子学生の%を示す。

※出身高校の四年制大学進学率（浪人進学者を含む）を「8割以上（中心値=90%）」「6割～7割ぐらい（65%）」「5割ぐらい（50%）」「3～4割ぐらい（35%）」「2割以下（10%）」の5段階でたずね、各大学ごとに進学率の平均を算出した。

かっている。周知のように、女性の職場進出が進み、一連の法制上の平等化政策は女性の生き方に新しい選択肢を加えることになった。じじつ、各種の意識調査は、伝統的な性別役割分業観が着実に崩れつつあることを示している。<sup>7)</sup>とくに、〈伝統からの脱却〉は、男性よりも女性において一層際立っている（女性の晩婚化・少産化）。その一方で、女性たちの結婚に対する〈没自立的〉性向が強まっていることを指摘するむきも少なくない。ある特定の立場からみれば、若い世代の女性たちの意識や行動は、〈伝統への回帰〉と指弾すべき嘆かわしい事態と映るかもしれない。しかし、女性を一塊の集団として把握することは、効果的な運動のための戦略ではあっても現状認識としては誤っている<sup>8)</sup>。女性の就労形態の多様化を背景に、<sup>9)</sup>あるいは高度産業社会の恵まれた物質的条件のもとで、〈女性＝一枚岩〉という把握はますます現実感覚からほど遠いものになりつつある。たとえば、性別役割分業観の世代間ギャップを注意深く眺めると、若い世代（20歳代）の基本的な特徴は、〈伝統への回帰〉や〈伝統からの脱却〉などではなく、価値観の多様化・分極化であることが読み取れる。<sup>10)</sup>ここに、〈女性内分化〉という視点のもとに従来のフェミニズム研究を脱構築していく論理的必然性と実践的必要性がある。<sup>11)</sup>

#### A. 〈女性内分化〉のダイナミクス——社会化機関としての家庭・学校——

ジェンダー関係の成り立ちと内実を捉えるために、本節では、女子学生自身が家庭という場にどのようにして自らを位置づけていくかを分析する。とくにジェンダー文化を構成する主要な側面である〈性的同一性〉(gender identity)と〈家庭性〉(domesticity)に焦点をあわせて、社会化機関としての家庭・学校が〈女性内分化〉のダイナミクスとどのように関わっているかを探ってい

く。<sup>12)</sup>

#### 1. 〈性的同一性〉の受容

まず、「女性としての自信をもっていない」という女子学生が6割を越えている（60.6%）点に注目しなければならない。この割合は、男子学生の場合（34.1%）に比べると格段に高く、2倍近い割合に及んでいる。伝統的な〈女性性〉からの〈脱却〉という趨勢の中で、女子学生の意識は少しずつ揺らぎ始めている。つまり、女らしさの受容は、男らしさの受容にくらべればはるかにおぼろげであるといつてよい。たとえば、「女（男）らしさ」について5段階で自己評価してもらったところ、「1」または「2」と回答した人（すなわち、自分の性を自認している人）の割合は、女性の場合男性の半数以下にとどまったのである（男性50.4%；女性22.6%）。同時に、〈性的同一性〉の受容の様子が女性によってさまざまであることも事実である。そこで、〈女性性〉のもっとも基礎的な構成要素である〈性的同一性〉をめぐって〈女性内分化〉がどのような契機で生じているかをたどってみる。

データは、女性らしさの自己評価がある種の物質的基盤をもっていることを示している。表1によれば、経済的に豊かな階層ほど自分自身を女性らしいと評価していることがわかる。<sup>13)</sup>D節で指摘するように、女性らしさの自己評価が家庭の経済的な条件によって一定程度左右されるという事実には、現代消費社会に固有の事情がある。しかしながら、女性らしさの自己評価は、物質的基盤によって決定づけられることを意味しているわけではない。さらに、考慮しなければならない家庭背景要因は、しつけのパターン、とくに、ジェンダー関係のありかたにかかわる社会化経験の特徴である。じじつ、女性らしさの自己評価は、大まかに言って母親の生き方と家庭での社会化のあり方からかなりの影響を受けている。

表1 女性らしさ<sup>1)</sup>の社会的・文化的文脈 (%)

独立変数名	I	II	III	IV	計
経済階層(←豊か 貧しい→) <sup>2)</sup>	32.2	28.9	19.2	14.3	22.6
らしさ教育(←差異化 同質化→) <sup>3)</sup>	32.7	25.0	18.4	15.5	22.6

$\chi^2 = 23.68$   
 $p < .001$   
 $\chi^2 = 35.41$   
 $p < .001$

注1) 女性らしさ(自己評価)：5段階評定法で「1」「2」(女性らしい) = I, 「3」 = II, 「4」「5」(女性らしくない) = IIIに再コードした。数値は、「I」の%。

注2) 経済階層(暮らし向き)：「あなたの家庭の暮らし向きは、次のどれにあてはまりますか」とたずね、「非常に豊か」「やや豊か」「ふつう」「やや貧しい」「非常に貧しい」の5段階で回答を求めた[なお、「やや貧しい」と「非常に貧しい」は同一カテゴリー(N)に括った]。

注3) らしさ教育(しつけの性別差異化)：「『女の子は女の子らしくしなさい』と言われてきた」「『女の幸せは結婚だ』とよく言われてきた」という項目への回答結果(4段階)の単純和をもとに4グループに分類した。

とくに、家庭的な専業主婦を母親にもつ場合、そして性別規範や〈女性の幸せ=結婚〉という観念を強調するしつけを家庭内で受けてきた場合に、自らを女性らしいと認識するケースが目立って多くなっているのである。<sup>14)</sup> とりわけ、性別に特化された〈らしさ教育〉を経験した者は、そうでない者にくらべて自らを「女性らしい」と認知する傾向が強いと言える(表1)。しかも、これは経済階層という要因とはまったく独立した関連である(図表省略)。要するに、家庭での社会化経験というミクロな要因が〈性的同一性〉の形成にきわめて重要な役割を演じているのである。

## 2. 〈家庭性〉の形成

さて、私的領域に踏み込んだ社会学的分析は、いまだ十分な展開をみていないというのが実情である。この点をふまえて、次に、〈家庭性〉という側面から〈女性内分化〉のダイナミクスを考察する。ここでは、家事を実際にどのくらい行なっているかという家事実施と結婚した相手との関係からみた性別役割分業観という2つの要素を取り上げる。前者は現在の実践レベルで、そして、後者は将来への見通しというレベルで、それぞれ主婦への予期的社会化の状況を表す有効なインデックスとなる。

### a 家事実施

まず、さまざまな家事について実施状況をたずね、項目間の内部関連を確認し、「食事をつくる」と「洗濯をする」という2つの項目をもとに〈家事実施度〉という合成変数をつくった。そのうえで、さまざまな変数との関連を探ってみたところ、さきほどみられた経済階層や性別社会化の経験などとは関連がみられなかった。通学形態による違いはあくとしても、家事をする習慣があるかどうかは、家族成員の就業パターンと深くかかわっている。すなわち、家事を実施する状況におかれているかどうかという「場」の必要によって、あるいは、家事を行

なうようなしつけを受けてきたかどうかによって左右されているようである(各々  $p = .002$ ,  $p < .001$ )。さらに、本人の家事実施は、父親の家事実施と正の関連がある<sup>15)</sup>(図表省略)。つまり、これらの結果から、父母ともに常勤の共働き家庭で娘が父親とともに家事の必要をサポートしているという状況がうかがえる。こうした家庭状況の中で、女子学生が必要な家事労働を補完するという仕組みが成り立っているのである。ちなみに、就労形態別では、母親がパートをしている場合には実施率がかなり低くなっている。しかし、家事実施という行為が女性らしさの自己評価へと結びつくことは決してない。表2の相関マトリックスが示すように、家事実施度は他の2変数とはほとんど意味のある関連を示してはいない。したがって、この家事実施という側面は、〈性的同一性〉の形成や伝統的な性別役割分業観の維持へと直接には結びつかないのである。

表2 従属変数の相関行列(r)

変数名	女性自認度	家事実施度	専業主婦志向
女性自認度	1.00	.06	.20
家事実施度		1.00	-.04
専業主婦志向			1.00

※女性自認度：「あなたは、自分を女らしい方だと思いますか」と問い、5段階評定法による回答を3段階に再コードした。

※家事実施度：「食事をつくる」「洗濯をする」(3段階評定)の単純和をもとに3グループに分類した。

※専業主婦志向(=伝統的性別役割分業志向)：結婚後の夫婦のあり方について回答を求め、「専業主婦型」=1、「準専業主婦型」=2、「両立型」=3、「分担型」=4の4グループに分けた。

### b 性別役割分業観

次に、結婚後の性別役割分業のあり方をめぐるかの女

たちの意識に検討を加える。ここでは、4つの主要な性別役割分業観を設定した。つまり、「家は私が守るから、相手には外でしっかり働いてほしい」(専業主婦型)、「お互いに仕事は大切だが、いざというときは女が家を守るべきだ」(準専業主婦型)、「家事も仕事も両立させるよう頑張りたい」(両立型)、「仕事に専念したいので、家事・育児は半々に分担してほしい」(分担型)の4タイプである。この性別役割分業観と関連する要因を探ってみたところ、さきの女性らしさの自己評価の場合と非常に似通った関連パターンが確認できた(表2も参照)。ま

ず、表3から明らかなように、経済階層の上位にあるものほど、専業主婦型のスタイルを希望する傾向が強く、逆に、分担型や両立型を志向するケースは少ない。また、家事実施の場合とは逆に、働いている母親をもつ者ほど〈家庭性〉が弱くなっている<sup>16)</sup>(図表省略)。さらに、家庭での社会化経験、たとえば、女性らしさを強調するようなしつけを受けたことが伝統的な性別役割分業観の形成に寄与していることも〈性的同一性〉の場合と同様である(表3)。なお、この関連は、経済階層という要因を統制しても依然として強く残っている(図表省略)。

表3 性別役割分業観<sup>1)</sup>の社会的・文化的文脈

(%)

経済階層 (←豊か 貧しい→)	I	II	III	IV	計	
専業主婦型	35.6	29.6	21.5	16.1	24.5	$\chi^2=23.13$ p = .006
準専業主婦型	16.9	27.3	20.3	23.2	22.3	
両立型	33.9	31.2	42.8	39.3	38.6	
分担型	13.6	11.9	15.4	21.4	14.6	
らしさ教育 (←差異化 同質化→)	I	II	III	IV	計	
専業主婦型	44.9	24.3	22.4	9.5	24.6	$\chi^2=83.97$ p < .001
準専業主婦型	22.7	22.5	22.9	21.1	22.3	
両立型	22.2	39.9	39.3	50.4	38.5	
分担型	10.1	13.3	15.4	19.0	14.6	
高校教育風土 (←差異化 同質化→) <sup>2)</sup>	I	II	III	IV	計	
専業主婦型	35.0	29.8	23.6	20.4	24.6	$\chi^2=17.09$ p = .047
準専業主婦型	21.0	25.5	21.7	22.0	22.4	
両立型	36.0	30.5	40.6	40.8	38.5	
分担型	8.0	14.2	14.2	16.8	14.6	

注1) 結婚した相手とどのような関係でいたいかをたずね、次の4つの選択肢の中から回答を求めた。「1 家は私が守るから、相手には外でしっかり働いてほしい」(専業主婦型)、「2 お互いに仕事は大切だが、いざというときは女が家を守るべきだ」(準専業主婦型)、「3 家庭も仕事も両立させるよう頑張りたい」(両立型)、「4 仕事に専念したいので、家事・育児は半々に分担してほしい」(分担型)。

注2) (高校生のときの学校生活について)「女性(男性)らしさのしつけが厳しかった」かどうかについて、4段階評定法でたずねた。

とはいえ、家庭の経済的・文化的条件が、〈家庭性〉形成の最終審級となるわけではない。たとえば、就学した学校(とくに、高校)がどのようなタイプの学校であったかによって、性別役割分業観は変貌する。表3は、高校が性別社会化に関してどのような方針をとっているかによって、性別役割分業観がかなり左右されることを示している。また、学業成績の低い者ほど女性らしいと自己評価し、将来は専業主婦でいたいと考える傾向があることを考えあわせれば、学校という制度が、性や学力に応じて人材を選抜・配分するだけでなく、結婚という将

来展望を与えることによって代替的なライフ・コースを歩むための予期的な社会化の担い手としても機能し社会的な「安全弁」を提供していると推論できる。さらに、専業主婦を希望する割合は、大学によってかなり大きく異なっていることも見落としてはならない。たとえば、4タイプのうち専業主婦型を選んだ者の比率は、最大のI大(39.1%)と最低のA大(7.1%)の間ではじつに5~6倍の開きがあるのである。たしかに、女性の〈性的同一性〉と同様、性別役割分業観は家庭内の社会化のあり方によってきわめて大きく左右される。したがっ

て、現在自らが位置している家族をひとつのモデルとしながら性別役割分業観が形成されるし、それを可能にする経済的基盤も等閑視することはできない。しかし、大学（高校）による大きな差異は、大学（高校）入学後のさまざまな経験を通じて、〈家庭性〉が大きく変容し得ることの傍証である。過去の文化に一定の拘束を（潜在的に）受けながらも、かの女たちがさまざまな生き方へと自らを変えていく余地は決して小さくない。その意味で、ここで想定した因果図式は、運命論として展開したわけではなく、そうした社会化要因の可変性とジェンダー関係の改革可能性を示唆するものである。と同時に、マクロな視点からみれば、このような〈女性内分化〉のダイナミクスを通じて、ジェンダー関係の固定化・構造化が創出されていると解釈することもできる。いずれにせよ、さまざまな社会化機関・教育制度間の〈共謀〉と〈葛藤〉は、既存のジェンダー関係を維持したり変更を加えたりする上で重要な役割を演じているのである。

（菊地栄治）

## B. 〈女性文化〉の構造—消費性・家庭性・オブジェ愛好—

本節では、“女性文化”<sup>17)</sup>がどのような側面をもち、他の諸属性とどのような関連にあるかを探り、現代社会における伝統女性性との《形態的同一化》について論じる。女性は、生まれたときから女の子むけの文化を準備され、そのなかで育つ。<sup>18)</sup>そこには、女性に不平等に構造化された社会の論理が刻印されており、幼いときから慣れ親しんだ女性特有の文化の住み心地のよさというものは、女性を抑圧された地位へと本人が意識しないうちに、あるいはかえって積極的な意味づけをもって方向づけることにもなる。<sup>19)</sup>

ここで設定した分析項目は、同性の友人との関係（表1のA群）と自身の行動（B群）についてである。それぞれ「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4段階で回答してもらった。肯定的回答率（「とても」＋「やや」と標準偏差を表1に示す。<sup>20)</sup>

表1 女性文化項目の肯定的回答率と標準偏差

【A群】			【B群】		
文化項目	肯定的回答率	標準偏差	文化項目	肯定的回答率	標準偏差
誕生日にはプレゼントをする	85.3(45.3)	.776	ショッピングに時間をかける	82.1(40.6)	.789
お互いに愛称で呼びあう	95.8(79.1)	.559	ファンシー・グッズを買う	27.6( 5.8)	.848
流行などで影響を受けやすい	39.8(10.8)	.859	丸文字を書く	15.6( 3.3)	.828
よくいっしょに買物をする	60.9(20.0)	.837	部屋が散らかっていると気になる <sup>21)</sup>	61.0(17.6)	.841
手紙のやりとりをよくする	44.3(14.9)	.968	心霊現象を信じる	49.9(15.2)	.996
			花の名前をよく知っている	29.1( 4.8)	.783
			ケーキをよく作る	27.1( 5.9)	.930
			インテリアの趣味にはうるさい	38.3( 8.2)	.882
			友だちの星座や血液型が気になる	31.7( 8.5)	.951
			自分の部屋にぬいぐるみが多い	36.8(11.3)	.999

※（ ）は「とてもあてはまる」のみの%  
〔1〕以後「あとかたづけ」と略す。

### 1. 女性文化の分化構造

A群とB群にそれぞれ因子分析を行ない、A群からは2つ、B群からは4つの因子を得た（表2、3）。しかし、女性文化の構造が複雑であるために、複数の因子負荷量が高くなる項目があり、また因子自体の性格づけが多義的になりうる。そこで、因子分析を最終到達点とみなすことなく、相関係数によっても項目の特徴づけを図っていく。

A群の第一因子は、「流行で影響」「いっしょに買物」

のように、ファッションや遊びのような消費行動を媒介にした友人関係で高い値をとっているのも、これを消費的因子と名づける。相関係数（=r）で見ると、「流行で影響」と「いっしょに買物」の相関は.380で、相関マトリックス中もっとも高い値を示している。「愛称」は、ここでは代表的とはいえない項目であるが、表1でもわかるように肯定的回答率では群を抜いて高い値を示している。<sup>21)</sup>第二因子は、「プレゼント」「手紙」といったやりとりの儀礼的因子としてみる事ができる。しかし、プレ

表2 A項目群の類型(斜交回転)

	第一因子 (消費的因子)	第二因子 (儀礼的因子)
流行で影響	.744	-.147
いっしょに買物	.489	.207
愛称	.210	.073
プレゼント	.143	.428
手紙	-.037	.405

表3 B項目群の類型(バリマックス回転)

	第一因子 (家庭性因子)	第二因子 (購買因子)	第三因子 (シブスブ因子)	第四因子 (少女文化因子)
インテリア	.670	.032	.010	.246
あとかたづけ	.366	.106	.024	.017
花の名前	.308	.030	.157	.307
ファンシー・グッズ	.038	.725	.102	.112
ショッピングに時間	.180	.335	.070	.033
心霊現象	.088	-.026	.603	.004
星座・血液型	.128	.112	.347	.152
丸文字	-.058	.117	.310	.046
ケーキ	.190	.045	.019	.555
ぬいぐるみ	-.016	.251	.178	.336

ゼントとなるキッチン用品やバースデーカード、キャラクター入りの封筒や意匠が凝らされた便箋、封のためのシール、絵葉書といった“モノ(オブジェ)”がやりとりの途上に現われるであろうことも注意しておくべきである。<sup>22)</sup>この中で、「プレゼント」は「いっしょに買物」との相関が高く( $r=.251$ )、また「いっしょに買物」は、B群の「ショッピングに時間」「ファンシー・グッズ」「インテリア」とも比較的相関が高い(それぞれ.196, .156, .168)。「インテリア」のアメニティ・グッズとしての性格に注目すれば、これらの項目に共通する“消費性”が女性文化を組織する一つの重要な契機になっていることがわかる。<sup>23)</sup>

B群から抽出された第一因子は、「インテリア」「あとかたづけ」「花の名前」で高い値を示す因子で、いずれも家庭内の飾りつけと美観に関するものなので、**家庭性因子**<sup>24)</sup>とよぶことができるだろう。第二因子は「ファンシー・グッズ」「ショッピングに時間」で高く、**購買因子**と名づけておく。第三因子は「心霊現象」「星座・血液型」「丸文字」で高い。すべて正統化されていないシンボル体系にかかわるものであるから**シンボリズム因子**とする。<sup>25)</sup>第四因子は、「ケーキ」「ぬいぐるみ」であり、少女期の趣味や嗜好を代表していることから**少女文化因子**とする。この因子は、「花の名前」「インテリア」でも高いことから、**家庭性**と結びついている可能性も示唆する。実際、「ケーキ」は「インテリア」「花の名前」との相関が高い( $r=.266, .238$ )。他方、「ぬいぐるみ」は、モノ(オブジェ)の愛好としての性格も強くもち、「ファンシー・グッズ」との相関は高い( $r=.248$ )。

以上のように、ここで設定した女性文化項目は、消費性との関連をもつもの、家庭性の面から理解できるもの、

少女期的なオブジェの愛好によってとらえられるものの、正統化されていないシンボル体系にかかわるもの、に大別される。シンボリズム項目以外は、グループ相互は両義的な項目によって結びついている。消費性と家庭性は「インテリア」、家庭性とオブジェは「花の名前」「ケーキ」「インテリア」、オブジェと消費性は「プレゼント」「ぬいぐるみ」「ファンシー・グッズ」というように。

これは、女性文化の各側面が連絡しあう関係をもつことを意味する。少女期的な嗜好は、ケーキを作るというかたちで家庭内的な指向性を形成し、また、花についての関心は、部屋の中に花を飾るという配慮となる。家内的な指向性は、消費の場面ではインテリアに対する関心となるだろう。家庭性とオブジェ・消費性の関係を検討すれば、女性文化が伝統的女性性とどのような関係にあるかが理解できるだろう。

## 2. 女性文化の関連構造

消費性・家庭性・オブジェ愛好という女性文化における三つの指向性について、その相互関連だけではなく、他の行動・意識特性との関連を調べることで、その特徴を明確にする。

### a. 消費性指向

まず、消費性と名づけた指向性について検討する。「プレゼント」「流行で影響」「いっしょに買物」「ショッピングに時間」「ファンシー・グッズ」「インテリア」の6項目がこの傾向をもつとしたものであるが、「ファンシー・グッズ」だけは他と共通した特徴がみられなかった。

これらの項目は、“おしゃれ指向性”とかなり強く結びついている(表4)。これは他の女性文化項目の相関

表4 消費性項目とおしゃれ指向

	髪の手入 <sup>[1]</sup>	ファッション	コーディネート	ブランド	靴の手入	洋服代 <sup>[2]</sup>	人前で化粧 <sup>[3]</sup>
プレゼント	.149	.129	.128	.113	.130	.102	.035
流行で影響	.224	.379	.164	.302	.049	.258	.212
いっしょに買物	.248	.270	.197	.243	.183	.205	.147
ショッピングに時間	.260	.259	.293	.175	.128	.214	.140
ファンシー・グッズ	.141	.056	.088	.054	.021	.023	.059
インテリア	.214	.306	.384	.280	.334	.259	.130

(数値はピアソンの積率相関係数：ゴシックの数字は $p < 1\%$ で有意)

- [1] 「次の項目は、あなたにどれくらいあてはまりますか。」に「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4段階で回答してもらった。項目は、「髪の手入れに気をつかう」「ファッションの流行には敏感だ」「服のコーディネートに気をつかう」「ブランドにはこだわる」「靴などの手入れはまめにしている」等。
- [2] 「あなたは、一か月の洋服・アクセサリー代に平均しておよそどのくらいつかりますか。」に「5万円以上」「3～5万円」「2～3万円」「1～2万円」「1万円以下」で回答。
- [3] 「人前に出るときには化粧をするものだ」という意見に対して、「とてもそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」で回答。

係数と比較しても高いものであることが確認された。これが単に、消費行動にのみ結びついたものでないことは、「髪の手入れ」「コーディネート」、また「人前では化粧をするものだ」という意見についても相関が高いことからわかる。「インテリア」という、自らの外見を直接飾るものではない項目が、かえってほとんどすべてのおしゃれ項目と高い相関を示していることから、女性文化の消費性が、外見を整えること全般に対するコンシャスネスから派生すると考えられるのである。

消費性項目と、男女関係にかかわる項目との関係も、外見へのコンシャスネスの存在を裏づけている。性別ステレオタイプ項目<sup>26)</sup>の中で、消費性項目と比較的強い関連を示すのは、「ファッション・センス(女・男とも)」「容姿(女・男とも)」である。文化項目のうち「流行で影響」と「いっしょに買物」で特に相関が高いが、これらはステレオタイプ項目の「収入(男性)」と「学歴(男性)」についても相関が高い。男性との交際で期待すること<sup>27)</sup>についても全般に相関は高く、小中学校で「男子にもてたかった」と思うことが多く、結婚相手に「みざれいである」ことと同時に「年上である」「学歴が高い」ことも求める傾向がある。

このように、女性文化における消費性は、外見重視と結びついており、恋愛や結婚に関しては、いわゆる「三高」を求める傾向が比較的強い。“若い女性の保守化”と呼ばれたりするものは、消費性、つまり高度消費社会の経済的な豊かさと密接に関係している。そこには、女性の社会進出につきまとう苦行的なイメージはなく、経済的な豊かさを享受し、自らの女性らしさをむしろ飾ることで楽しむような、一種の楽観主義さえ見て取れるの

である。男性にたいしても、精神主義的な関係を嫌って外見のよさを求める。安定志向に見えるものは、むしろ楽しさの追求として考えられるのである。

外見重視にはもうひとつの側面がある。外見重視は、伝統的な女性性と矛盾しないし、むしろ適合性、少なくとも両立可能性をもつものである。外見へのコンシャスネスは、美的な存在・見られる存在としての女性を結果的に肯定するものであるし、「インテリア」に象徴されるように、それが家庭性と結びついたときには、家の中をきれいに保ち、将来的には夫の身なりを整えてやるということと結びついていく、と考えられる。

#### b. 家庭性指向

次に、家庭性を示す項目(「インテリア」「あとかたづけ」「花の名前」。「ケーキ」はここでは参考項目として扱う)について、他の項目との関連を探る(表5)。

「インテリア」は消費性だけでなく、家庭性にもかわる二面性をもつ項目である。そればかりか、双方にとって代表的なものでもある。家事の実施について、家庭性項目との相関をしらべてみると、ほとんどの項目で有意な相関がある。

しかし、家事実施よりも全体的に高い相関となるのは、おしゃれ項目のうち身の回りをきれいに保つ項目である。「インテリア」は消費性との関連もあり、他の家庭性項目より高い値となるが、「ほころび」や「靴の手入」ではどの項目も高い値をとっている。

家庭性指向は、家事を実際に行うことに直接結びついているというよりも、身だしなみや整理整頓、きれい好きといった身の回りをきちんと整えておく感覚(neatness)から派生するものと考えられる。これらは、直接物事

をニートに保つことに関連したもの（「あとかたづけ」）もそうでないもの（「花の名前」）もあるが、身の周りの物事に対する一定の姿勢＝距離の感覚をもっている。ただし、これで家事全般をカバーできるわけではない。掃除機をかけること、あるいは洋服のほころびに気づいて繕おうと思うこと、これらはすでにニート感覚の中に含まれているが、例えば食事の仕度のようにニート感覚と結びついていないものもある。この場合、「ケーキ」のように、ものを作るというアクティブな感覚が必要になるだろう。また、消費性項目におけるショッピングが、食事

の買物へ、行動の形態において一致しており、食事の買物の導入的・予備的な行動となる。しかし、ニート感覚は、家事を構成する部分集合にすぎないにしても、家事を行うことと決して矛盾はしない。女性が、社会制度の強制力により、すすんでであれいやいやであれ、家庭に入って実際に家事を行わなくてはならなくなったとき、隠れた能力として発揮されるのは、ニート感覚という別なもののかたちを借りてすでに潜在していた姿勢・指向なのである。

表5 家庭性項目と家事実施・身のまわりへの配慮

	掃除機 <sup>(1)</sup>	食品買物	料理	洗濯	アイロン	フォーマル <sup>(2)</sup>	ほころび <sup>(3)</sup>	髪の手入	コーディネート	靴の手入
インテリア	.193	.143	.099	.100	.106	.106	.268	(.214)	(.384)	(.334)
あとかたづけ	.288	.079*	.067*	.134	.170	.167	.289	.193	.210	.245
花の名前	.118	.129	.128	.051	.125	.162	.226	.077*	.144	.242
ケーキ	.075*	.115	.121	.007	.075*	.139	.192	.139	.110	.125

数値はピアソンの積率相関係数；ゴソックは $p < 1\%$ で有意，\*は $p < 5\%$ で有意。（ ）は表4で既出。

[1]「あなたは、ふだん次のことをどのくらいしていますか。」に「よくする」「たまにする」「まったくしない」で回答。項目は「掃除機をかける」「食料品を買う」「食事をつくる」「洗濯をする」「アイロンがけをする」。

[2]「次の項目は、あなたにどのくらいあてはまりますか。」という設問で「ジーンズなどのラフな服装よりフォーマルな服装が好きだ」に4段階で回答。

[3] 同様に、「他人の服のほころびや汚れが気になる」に4段階で回答。

### c. オブジェ愛好

最後に、少女的な趣味とオブジェに対する愛好を示す項目（「ぬいぐるみ」「ケーキ」「プレゼント」「手紙」。関連項目として「ファンシー・グッズ」「花の名前」「インテリア」）が、どのような行動関連のなかで存在するかを検討するが、全体的にいって、これらの項目には、共通して高い相関をもつ社会的属性があまり見当たらない（表6；ただし女性的社会化項目のみ）。それはひとつには、これらが趣味的な項目であることが多く、確かにオブジェへの愛好という点で共通はしていても、その内実がかなり異なっているからと考えられる。

高校での学校経験についての設問で、気軽に話し合える先生が多かった」という回答が比較的高く、反対に「何のために学校に行くのかわからないことがあった」は負の相関となる傾向がある。一方で（学校での）「女性らしさのしつけが厳しかった」で、いくつかの項目での相関が比較的高くなった。これは家庭でのしつけでも同様で、「女の子らしくしなさいと言われてきた」で、大半の項目が比較的高い相関値となった。そして（家庭では）「異性との交際に口うるさい方だ」についても同様の傾向が見られた。母親については「家庭的な方だ」と

の相関が「ぬいぐるみ」「ケーキ」「手紙」「花の名前」「インテリア」で高かった。

結婚のメリットについての設問では、「ファンシー・グッズ」は「幸せな家庭をもてる」「愛する人と一緒にいられる」などと相関が、「ぬいぐるみ」は「幸せな家庭」と「子どもをもてる」との相関が比較的高かった。「ぬいぐるみ」は性別ステレオタイプ項目でも「子ども好き（女・男とも）」で有意な差がある。結婚相手には「やさしい」ことを求め、「家庭を大切にすること」を期待している。

「自分を女らしい方だと思いますか」という問いに対しては、どの項目でも「女らしい」と答える傾向が強かった。また、人生で大切なことは「趣味を楽しめる生活を送ること」か「のんびりと気楽に暮らすこと」と答える傾向があった。

全体的傾向としては、オブジェ指向というのは、家庭・学校での性別社会化と少なからず関連しており、女らしさの自認と関連する結果になっている。これには家庭的な母親の存在が大きいだろう。<sup>28)</sup>そして、頼れる男性と結婚して幸せな家庭をもち、趣味を楽しんでのんびり暮らすことを望んでいる。

オブジェ指向に見られる内向的な女らしさは、頼りにする人間（先生であれ結婚相手であれ）を必要としており、女らしさの自己定義とともに家庭に引きこもる、という経路をたどって家庭へと至るものと思われる。ここでは、オブジェ指向に先行して内向性が存在するのか、性別社会化とオブジェ愛好との交互作用が内向性をつく

りあげるのかは明確にすることはできないが、いずれにしても、オブジェ指向は媒介的作用を果たしていると考えられる。そして例えば、ぬいぐるみの愛好が、自分の赤ちゃんを抱くという空想とないまぜになるようなかたちで子ども好きへとつながる経路も想像できるのである。

表6 オブジェ愛好と女性的社会化

	母親は家庭的 <sup>(1)</sup>	女らしく <sup>(2)</sup>	女らしさしつけ <sup>(3)</sup>	女らしさの自認 <sup>(4)</sup>
ぬいぐるみ	.141	.148	.115	.137
ケーキ	.108	.138	.054	.255
プレゼント	.040	.128	.070*	.099
手紙	.103	.015	.100	.027
ファンシー・グッズ	.061*	.116	.093	.054
花の名前	.092	.086	.063*	.196
インテリア	-.007	.067*	.140	.161

数値はピアソンの積率相関係数；ゴシックは $p < 1\%$ で有意，\*は $p < 5\%$ で有意。

[1] 「母親は家庭的な方だ」に4段階で回答。

[2] 「あなたは、どのようにしつけられてきましたか」で「『女の子は女らしくしなさい』と言われてきた」に4段階で回答。

[3] 「あなたが高校生ときの学校生活についてうかがいます。」で「女性らしさのしつけが厳しかった」に4段階で回答。

[4] 「あなたは、自分を女らしい方だと思いますか」について、5段階で回答。

### 3. まとめ—女性文化の形態的同一化—

本節は、「女性文化」を、消費性・家庭性・オブジェ愛好という三つの局面に注目して分析を行った。<sup>29)</sup>そして、これらは、それぞれ違った道筋ではあるが、性役割分業における伝統的な女性性へと導くように働いていることを示唆した。伝統的な女性性の世代的伝達とは、複雑な経路を経由して成り立っている事態なのであり、それを典型的に示すのが消費性にかかわる文化項目であった。消費性は、女性の選択肢が多様化し、また高学歴化が進展しているにもかかわらず、なぜなお伝統的な女性性に女性が回帰するよう見えるか、なぜ伝統的な女性性を女性自ら選択するのか、という疑問に説明を与えるものである。消費性という現代的な位相とともに、現代以前にも存在していたであろう家庭性指向とオブジェ愛好が伝統的な女性性と適合的な関係にあることも示された。消費性も含めて、女性文化は、伝統的な女性性のもつ形態と類似した形態をもっている。女性文化は、形態的に似たものへ、形態的に似ているという理由で、同一化する。その過程で意味の変質が生じるが、形態的な変換は意味論的な変換に先立つ。これを女性文化と伝統的な女性性との“形態的同一化”<sup>30)</sup>と呼ぶ。現代消費社会は、このメカニズムと共鳴し、それを増幅しているように思われる。

(加藤隆雄)

### C. ライフコースにおける「結婚」と「仕事」の関係—私的領域と公的領域の境界線をめぐって—

#### 1. 「結婚か仕事か」という問題領域

女性の結婚観の関係を考えるには、家族や家庭そのものを扱うだけでは不十分である。女性が結婚をライフコースにおける他のイベントとどのように妥協させたり、融合させたりしながら調整し合っているのかという視点が必要である。これまで女性の、結婚問題は「仕事に就く／家庭に入る」といった2つの対立する問題として捉えられるのが一般的だった。「女性が結婚しなくなったのは経済的に自立するようになったからである。」「子どもを生まなくなったのは仕事をもつようになったからだ。」といった言説はこのような考え方を象徴している。つまり女性にとって「仕事をもつこと」と「結婚をすること」がキャリア志向か否か、あるいは家庭志向か否かといった相反する価値を具現するイベントとして捉えられてきたのである。また従来の研究においても、女性の問題が男女平等問題の枠組みにおいてのみ扱われる傾向がみられ、「女性の就労＝女性の社会進出＝女性解放」といった単純なイメージで捉えられがちであった。したがって女性の晩婚化は家庭という呪縛からの解放の指標としてみられてきた。

女性にとっての「結婚」と「仕事」が何を意味してい

るのかは、どの程度晩婚化が進み就労率が高まったかという量をみるだけでは明らかにならない。現実には則してその質的な多様性に注意しながらみていく必要がある。本節ではこれから職業に就こうとする女子大学生の結婚観と職業選択をめぐる意識に焦点を当て、(1)彼女たちが「結婚すること」と「働くこと」のあいだのバランスをどのようにとっているのか、またその際(2)「女性性」への志向が職業選択とどのように関連しているのかについて考察を進める。結婚に関する意識と職業観の関連をみることは、私的領域における女性内分化の状況を描き出すだけでなく、「女性が働く」という公的領域に取り込まれた男女平等問題を脱構築することにもつながるだろう。

## 2. 女子学生の結婚観

### a. 結婚時期の遅延

厚生省の「人口動態統計」によれば、女性の晩婚化・非婚化が年々進んでいる。平成元年には25.8歳と昭和30年の24.4歳に比べ、1.4年高くなっている。これは高学歴化の進展により、就学年数が長くなったこと、したがって就職時の年齢も高くなったことなどが原因であるといわれている。<sup>31)</sup>しかし晩婚化の要因は結婚の平均初婚年齢が上昇していることのみではない。結婚についての意識を見ると総理府の世論調査によれば、20-29歳の女性のうち「結婚した方がよい」と答えたのが24.3%であるに対して、「どちらでもよい」とするのは75.3%となっている。<sup>32)</sup>

本調査では「結婚するとしたら何歳ぐらいになると思いますか」という質問だけでなく、結婚の意向について微妙なゆらぎをたずねてみた。その結果、《結婚したいが早くしなくてもよい》と《結婚するつもりだができれば遅くしたい》が合わせて約50%にものぼっている。また、《あまり結婚したいとは思わない》も10%をかぞえている。こうした晩婚化・非婚化の原因にはさまざまなものが考えられるが、少なくとも、「結婚」というイベントに対する社会的圧力は弱まっているようである。しかし一方で、《結婚は早くしたい》が約10%、《結婚の平均年齢までに結婚したい》の約25%を合わせると結婚願望を強く持っているものも約35%にのぼっている。このように結婚の時期をめぐるでは結婚を早くしたい、あるいは平均年齢までにしたい「早いグループ」と晩婚・非婚希望の「遅いグループ」の2つに分かれていることがわかる。

### b. 結婚時期をめぐる揺らぎの背景

まず、「早いグループ」と「遅いグループ」の両方に、結婚するメリットについてたずねてみた。(表1)「早い

グループ」の場合《人生のよきパートナーを得られる》に対して非常に肯定的であるものが約72%であり、また《精神的な支えを得られる》についても同じく82%となっている。結婚がライフコースにおいてパートナーの精神的な支えを得て共に安定した生活を送るための重要なイベントとして捉えられていることがわかる。一方、「遅いグループ」でも結婚するメリットとして《人生のよきパートナーを得られる》《精神的な支えを得られる》についてはそれぞれ約67%、66%と「早いグループ」に比べると数値は低いものの、いつかはするものとしての結婚が強く意識されている。

この2つのグループは「結婚すること＝良きパートナーとの生活」という図式が強く表れている点では共通しているがパートナーとどのような関係を維持していくのかについては意見を異にしている。たとえば《幸せな家庭をもてる》については「遅いグループ」では約39%が肯定するにとどまり、「早いグループ」の68%に比べその割合は著しく少ない。「早いグループ」にとって結婚することは、そのまま「家庭をもって幸せに暮らすこと」につながっているのに対し、「遅いグループ」では「結婚すること」と「家庭をもつこと」の間には距離がある。このように結婚時期をめぐる分化の一つの要因として家庭観のちがいが重要であることがわかる。<sup>33)</sup>

しかし、家庭へのあこがれだけが結婚時期を左右する原因となるわけではない。早く結婚したくない理由として一番多いのは、《自由な生活をエンジョイしたいから》が「とてもあてはまる」、「ややあてはまる」の合計で約83%である。一方《結婚しなくても幸せになれるから》という理由を肯定するものは約33%にすぎない。全体的にみると結婚はいつかするもの、したいものであるものの、独身生活に比べ、あるていど拘束的な生活の開始であるとのイメージがあることがわかる。また、《いろいろな人とつき合いたいから》についても72%が肯定していることから、結婚の遅延にはよりよい相手選びといった要素もあるようだ。このように結婚を急がない「遅いグループ」は私生活エンジョイ派と結婚モラトリアム派が多数を占めている。

## 3. 女子学生の仕事観

### a. 結婚の遅延とキャリアアップの関係

それでは、結婚を希望する時期と就労に対する意識との関係はどうなっているのだろうか。果たして、就労への意欲の高まりは、結婚を遅らせることに直結しているのだろうか。ここでは結婚を遅くしたい理由として《自由な生活をエンジョイしたいから》《いろいろな人とつき合いたいから》と答えた人が、《仕事に打ち込みたい

から》という理由についてどのように答えているかをみた。《自由な生活をエンジョイしたいから》を積極的に肯定する者のうち約75%が、また《いろいろな人とつき合いたいから》を積極的に肯定する者についても約80%が《仕事に打ち込みたいから》という理由も同時に肯定しているのである。<sup>34</sup>

このように私生活エンジョイ派が同時にキャリアアップのために結婚を先送りしていることから、結婚を遅らせることは、単なる結婚モラトリアムという観点からもまた、「仕事に生きる＝非結婚志向」といった単純な図式からも、捉え切れないものであることがわかる。さらに仕事に関するさまざまな意識をみることにより、仕事において何を重視し優先することがライフコース選択の鍵となっているのかを探っていくことにする。

#### b. 仕事の条件と業績志向

仕事を選択するにあたって重視する条件を全体にきいてみた。まず、《やりたい仕事ができる》ことをどの程度重視するかについては、約60%が「とても重視する」と答え、「やや重視する」を含めると95%がこれを肯定している。一方、《仕事が楽であること》については、「とても重視する」は1割に満たないが、「やや重視する」を含めると約45%が重視している。また約8割が《仕事を通じて自己実現をはかりたい》（「とてもそう思う」と「ややそう思う」の合計）と考えており、全体としては働くことに積極的な意味を見いだそうとする姿勢がうかがわれる。<sup>35</sup>

しかしながら業績志向の指標として《出世の見込みがあること》についてみると、「とても重視する」と答えたのは約7%であり、「やや重視する」を含めてもキャリアを積むことへの意欲を示しているのは約4割にすぎない。<sup>36</sup> 近年、離転職率が上昇し、「就職＝就社」といった考えが減ってきたといわれている。一旦ある職場に入ったからには、「仕事だからどんな仕事でもやる」といった献身型が減り、「やりたい仕事をできれば楽にやりたい」というマイペース型が増加する傾向が女性の間にもあることがわかる。

#### c. 希望する職業とキャリア観<sup>37)</sup>

それでは実際の職業選択のなかで結婚と仕事の折り合いはどのようにつけられているのだろうか。表2が示すように、一般職を希望するものは他に比べて《仕事ひとすじで頑張りたい》（プロフェッショナル度）とする者がきわだって低い。<sup>38)</sup> さらに、保母・教員希望、一般職希望よりも、マスコミ、会社員総合職を希望するものの方が《出世の見込みがある》（業績志向度）ことを強く望む傾向がある。このように職業選択自体に仕事へのコミッ

トメントの強さ、仕事をライフコースのなかでどのように位置づけるのか、といったことがある程度反映している。また、希望する職業は結婚の時期とも深く関係している。結婚を早くしたい比率が最も低いのは、マスコミを希望者で総合職、保母・教員が続けて低い。一方、一般職では約半数が早くしたいもので占められている。

このように希望業種、職種にはキャリアパターンの志向性がある程度反映しており、それぞれの職業意識に合った職業を選択することで結婚の時期を調整している。<sup>39)</sup> たとえば教職員、公務員希望の場合、比較的長期就労継続を希望する者が多いと思われる。また、マスコミや自由業関係のしごとを希望する場合、高い専門性と信頼性が要求されることを考えても、短期の就労を考えていることは考えにくい。また、一般企業事務系における総合職の場合もさまざまな条件があるにせよ、就労をできるだけ続け仕事を通じて社会的地位を確立しようとする志向性をもってると予想される。

### 4. 公的領域と私的領域の境界線

#### a. 交差する3つのロジック

このように見てくると女子学生の職業選択に影響を与えているのは、(1)仕事をもつことを重視：重視しない、(2)業績志向：非業績志向、(3)家庭重視：家庭非重視の3つの軸であることがわかる。そしてこれらの3要素が関係し合って公的領域と私的領域の境界線の設定がなされることにより、キャリアパターンを含めたライフコース選択が行なわれている。これらの軸によって考え得る選択肢には、[仕事非重視＋非業績志向＋家庭重視]（＝家庭優先型）、[仕事重視＋非業績志向＋家庭重視]（＝家庭志向型）、[仕事重視＋非業績志向＋家庭非重視]（＝仕事志向型）、[仕事重視＋業績志向＋家庭非重視]（＝仕事優先型）、[仕事重視＋業績志向＋家庭重視]（＝両立型）等がある。

今回の調査では表2でみられるように、希望職種でみるかぎりにおけるグループは次の3つである。一つ目は「仕事優先型」である。マスコミ・総合職を希望する者は、プロフェッショナル度、業績志向度が高いが、このことは、彼女たちが、現在の就労環境の中で比較的能力を活かしやすい業界や職種をあらかじめ志望しているためであることがわかる。彼女たちは、自分の能力や資格・技術を生かすことを基本にキャリアアップをはかって行こうとするため結婚や出産・育児といったイベントをなるべく先送りする傾向にある。次に「家庭志向型」の場合、結婚はいわゆる適齢期までに実現させたいイベントとしてとらえられている。保母・教員等を中心とするグループがこれで、彼女らは比較的長期の就労継続をめ

ざしているが業績志向度は低く、条件によっては家庭を優先する傾向がかなり高い。最後に、「家庭優先型」、一般職=OLをめざすグループがある。彼女たちは、業績的価値を女性性と対立するものと考えているため、とりあえず卒業後就職はするがなるべく早く結婚して“家庭に入りたい”と考えている。

以上のようなタイプ分けは、実際に就く職業ではなく希望レベルであるため、実際にはさらに複雑な決断を強いられながらの就労パターンが存在するであろう。しかし、ここで重要なことはどのタイプであれ、結婚観や家庭観が職業選択に大きく影響を与えている点である。

#### b. まとめ

このような結婚観や家庭観に影響を与え、私的領域と公的領域の境界線を作り出している要因の一つが「女性性」への志向である。たとえば《女性にあった仕事》ができることについてみると、どの職業希望においても比較的数値が高く職業選択において「女性性」あるいは「女性であること」が意識され、影響を与えていることがわかる。(表2)

この《女性にあった仕事》という指標にはいくつかの意味が含まれている。たとえば女性の家庭志向性に合っ

たという意味で保母、カウンセラー、看護婦等の「女性的な仕事」を指す場合、あるいは女性が結婚と仕事のバランスをうまく取るために「女性にとって無理のない働き方ができる仕事」ということも考えられる。しかし、どちらの意味であれ「女性であること」への囚われ、「女性性」の位置づけが結婚観や性別役割分業観に影響を与え、これらが翻って希望する職業を規定していることはたしかである。このように女子学生の職業選択が公的領域の問題の枠の範囲にとどまらない。そして公的領域と私的領域の狭間における葛藤が、女性内分化を生み出す原因となっている。<sup>40)</sup>

もちろん個別にみていくと、女子学生たちのなかには「仕事か結婚か」「仕事も結婚も」といった葛藤を乗り越えようとする動きもみられる。また、《女性性》あるいは《女性にあった仕事》がかならずしも職業選択の上で葛藤を生み出しているとはかぎらず、積極的に利用されていることもある。この点については女子学生の「自由記述」を扱ったⅢ章A節において検討することにする。

(吉原恵子)

表1 結婚時期と結婚するメリット<sup>12)</sup>

	[早いグループ]	[遅いグループ]	(%) 有意水準
《人生のよきパートナーを得る》	71.6	66.7	not sig.
《精神的な安定を得られる》	79.0	66.0	p < 0.01
《幸せな家庭がもてる》	68.4	38.5	p < 0.001

注1) それぞれ4段階評価のうち「とてもそう思う」数値の比較である。

注2) 「早いグループ」とは結婚を「早くしたい」「平均年齢までにしたい」の合計。また「遅いグループ」は「結婚したいが、早くしなくてもよい」「結婚するつもりだが、できれば遅くしたい」「あまり結婚したいとは思わない」の合計。

表2 職業選択/結婚時期/業績志向

	結婚の時期が早いグループ		《仕事ひとすじ》	《出世見込み》	《女性にあった仕事》(%)
	(実数)	比率			
保母・教員・司書等	(281)	40.7	19.9	37.4	64.5
マスコミ	(66)	28.8	21.2	47.0	63.6
総合職	(95)	37.2	21.3	54.7	63.2
一般職	(112)	49.1	6.3	29.5	77.8

#### D. 階層・教育と〈女性内分化〉

##### 一 二つの女性性を通じた「保守化」メカニズム

現代の女子学生は結婚や仕事に対し、それぞれ固有の期待や意味を付与しており、また、女性性に対して取る関係も、決して一様ではない。前節で見たように、彼女たちがその将来構想という観点からみて様々なグループに分化してきているのも、結婚や仕事や女性性がもはや一つの内容に固定されていないからこそ可能なことなのである。現代の女性もはや“伝統的なジェンダー構造の束縛から解放されれば、女性役割を脱ぎ捨て業績主義的価値に近づく”といった一元的な進化論図式では把握することは不可能なのである。

では、こうした女性文化の多様化の現実を適切に理解し、そのうえで、なぜ現代の女子学生の中には「保守化＝専業主婦志向」に向かう者もいるのかを理解するには、どのような分析枠組みが有効だろうか。われわれは、次の二つの視点の必要性を主張したい。ひとつは、現代社会においては、女性を閉じ込める様々な規範的境界や二分コードが徐々に崩れ、「女性性」を指し示す諸要素が、それを通じて自らアイデンティティや生き方を作り上げる資源・道具となってきた、ということである。しかし、これは次の女性内分化の視点に結び付けられて初めて実質的な説明力を獲得する。すなわち、女性は女性であるという資源をどのように使用すると適合的であるかが、他の社会構造・システムの中で置かれた位置に応じて変わってくる、という視点である。もちろん、これは一方向的な一度限りの関係を意味しているのではない。ある社会的位置に合わせる必要から身に纏われた女性性は、それ以後の選択、たとえばどのような結婚をするかといったライフコース上の新たな“一手”に影響を与える一種のハビトゥスとして彼女の選択に影響を与える。こうした相互強化プロセスをへて女性は「分化」していくのである。

では、このように女性の戦略を変化させ、女性を異なった方向へ（ある種の女性を「専業主婦」志望へ）と向かわせる社会的・構造的条件として重要なものとは一体何であろうか。われわれが重要であると判断し検討が必要であると考えるのは、消費社会という文脈・条件の中での《経済的豊かさ》と学歴社会という文脈・条件の中での《教育／学業成績及び大学チャーター》の二つである。従って、この二つの文脈および変数が女性自身の実践・自己形成にどのような影響を与えているのか、そしてそうした実践・自己形成を通じて女性のライフコースがいかに「分化」していくのかを解明・検証する作業が本節の中心課題となる。

ところで、本節の狙いは「再生産」の枠（伝統の連続性やマクロ主体の意図）には収まり切らないところで作動する「専業主婦」生成のメカニズムを探ることにあるが、この目的を果たすため、ここでは「女性性」というあまりに未分化で包括的な概念を次の三つの側面に区別して使用する。すなわち①文化的な女性らしさのイメージ②男／女のカテゴリー区分への自覚③伝統的に女性が担うとされてきた女性としての機能の三つである。この三つの女性性はそれぞれ《女性らしさ》の自己評価、《女性としての自覚度》、そして《家事実施度》という変数で代表させる。<sup>40</sup>ただし、これらの変数は分析のための道具であり、これを実体化すべきではない。《女性らしさ》は、女性らしいとされる行動を繰り返し行い、またそのように演出するといった実践の結果現れるものであり、《自分は女性だという自己規定（自覚）》も、何かある事態に対処する際の言い訳などとして、使用されることを通して現れるものなのである。

それではまず、《経済的な豊かさ》が女性の身につける女性性とどのような関係にあるのかという点から検討していくことにしよう。注目されるのは、《経済的豊かさ》が文化的イメージとしての女性性、つまり《女性らしさ》と極めて親和的であるという点である。表1はまさにこうした親和性を示したものだが、女性は経済的に豊かな階層の出身であるほど、自分を女性らしいと評価し、女性としてのアイデンティティに自信を持ち、男に生まれ変わりたいとする割合も少ないのである。こうした《経済的豊かさ》と《女性らしさ》との親和的關係は、もちろん文化的「再生産」の観点から説明できる部分も大きいだろう。しかし、われわれは《女性らしさ》が「再生産」される局面のみならず、経済的な豊かさが絶えず《女性らしさ》を「生産」する局面にも着目する必

表1 経済階層と女性らしさの自己評価 (%)

経済階層	←豊か 貧しい→			有意水準
	I	II	III	
①自分は女性らしい	29.5	19.2	14.3	p<.001
②性アイデンティティ悩む	12.4	15.8	21.4	p<.05
③男に生まれ変わりたい	24.4	31.7	42.9	p<.025
④女の子は素直さ大切	28.3	24.6	19.6	

ただし①は女性らしさを5段階で自己表かし上から1か2を選んだ人の割合の合計。②は、「女としての自分に自信がない」に「とてもそう思う」と答えた人の割合、③は、「生まれ変わるとしたら男性か女性か」という質問に「男性」と答えた人の割合、④は、子どものしつけで「素直さ」を最も重要であると答えた人の割合。また、経済階層は「非常に豊か」「やや豊か」をI、「ふつう」をII、「やや貧しい」「非常に貧しい」をIIIとした。

要があると考えられる。というのも、現代的な意味で女性らしい存在で「ある」ためには、B節で見たように、たくさんのモノ、特に高価なモノに囲まれ、絶えず遊びや快楽のための消費を行うといったことが不可欠で、これらの条件は経済的豊かさを前提とすることだからである。

表2 《消費傾向》の男女差 (%)

	女	男	有意水準
①人生豊かさ大切	31.9	21.6	p < .05
②ショッピング長時間	40.5	13.5	p < .001
③高級ホテルを利用	11.9	7.9	—

ただし、①は人生で「経済的に豊かな生活を贈ること」が大切であるに、「とてもそう思う」と答えた人の割合。②は「ショッピングには時間をかける」に「とてもあてはまる」と答えた人の割合。③は「高級ホテルを利用」して遊んだ経験のある人の割合。

表2が示すのは、こうした《女性らしさ》と《消費傾向》と《経済的豊かさ》との間の親和関係である。この表から明らかなのは、「経済的な豊かさ」を求めるのは男性よりも女性であり、また「ショッピング」や「高級ホテル利用」などに見られるような高価な遊びをよく行うのも女性だということである。もちろん、これは「女性である」という生物学的な事実の問題ではない。消費社会の中で活発に活動することが現代的な意味での《女性らしさ》につながる、と考えるべきである。実際、同じ女性でも、「人生に豊かさ」を求め、「ショッピング時間」が長く、「高級ホテル」で遊び、「ファッションやブランド」にこだわる女性、つまり消費社会との親和性の強い女性ほど、自分を女性らしいと評価する割合が高くなっているのである。もちろん、ここに見られる相関関係を因果関係として確定するのは難しい。むしろ、この関係は、《女性らしさ》と《経済的豊かさ》と《消費活動》相互の関係として次のようにとらえられるべきだろう。つまり、《女性らしさ》は一方で、消費社会の中で、経済的な豊かさに恵まれた女性が消費行動を絶えず行うことを通じて構築されるものであり、他方で経済的豊かさを承認・羨望する人々によって消費される「文化項目」、あるいはそうした観衆を前に階級的誇示を行うために利用・演出される「道具」という二重の意味を持っているのだ。

では続いて、第二の変数、すなわち《教育》と女性性との関連に目を向けることにしよう。《教育（学業成績や大学の選抜性）》と《女性らしさ》の間には、それほど目立った関連は見られない。しかし、女性であることは《女性としての自覚＝女だからという論理》を通し

表3 《女性らしさの自己評価》と消費傾向 (%)

女性らしさ	← 強 →			有意水準
	I	II	III	
①人生豊かさ大切	32.7	33.8	28.8	—
②ショッピング時間長い	48.5	40.0	25.8	p < .05
③高級ホテル	20.4	10.1	7.1	p < .001
④ファッションに敏感	44.9	32.9	29.9	p < .005
⑤ブランドにこだわる	38.3	23.3	23.6	p < .005

ただし、④は「ファッションの遂行には敏感だ」に、⑤は「ブランドにこだわる」に「ややあてはまる」に答えた人の合計。

て、《教育》と強く関連している。「女なのだからそれはほどこい大学をめざさなくてもいいと思った」ことのある女性、「勉強家の女子を見て『そんなに頑張らなくてもいいのに』と思った」ことのある女性は、いずれも30パーセント前後おり、「男子にはかなわない」と思ったことのある女性は、60パーセント近くにもなる。もっとも、この意識が、成績を下げる独立変数として機能しているかどうかは疑問である。むしろ、思わしい成績が取れなかった結果、逃げの口実として《女性としての自覚》が現れるというべきだろう。これに対して、よい成績は、結果として、「能力を生か」したり、「仕事を通じて自己実現をはか」といった《自己実現意欲》を高めるよう働く。このように《教育》は二種類の女性を作ること、つまり《自己実現意欲》が高い女性と、《女性としての自覚》の強い女性とに分化させることに貢献していることがわかる。もちろん、ここでのわれわれの目的は《教育＝学業成績》が《自己実現意欲》の有／無に影響を与えるということを主張することにあるのではない。この点に関しては男女の違いはない。<sup>42</sup>女性の場合、学校でのパフォーマンスの違いが単にやる気の有／無といった量的な差として現れるだけでなく、《女性としての自覚》の強弱としても現れること、いわば量的な差と質的な差との二重の差異として現実化することが特徴的なのである。

ところで、こうしてひとたび獲得された《女性らしさ》や《女性としての自覚》は、彼女のジェンダー的行為や将来選択、とりわけ男女関係の在り方や結婚に対する構えに重要な影響を与える。こうしていわば、女性性を通じたライフ・コース選択におけるトラッキング効果が発生するわけである。以下では、実際に《女性としての自覚》《女性らしさ》／《自己実現意欲》といった女性性／非女性性と関連のある三つの要素が、結婚への構えにどのような影響を与えているのかを検討していくこと

にしよう。

まず、結婚を「早くしたい」か「遅くてもよい」という区別、専業主婦志向が強いのか、平等志向が強いのかという区別との関連を見てみると、《女性らしさ》を身につけ、また《女性としての自覚》が強いと前者、つまり「早婚」傾向、「専業主婦」傾向が強いのに対し、《自己実現意欲》の強いと後者、つまり「晩婚」傾向、「平等」傾向が強くなることがわかる。しかしながら、前節でも触れたように、ここに現れた差異は決して結婚に対する「肯定／否定」の差異を示しているわけでも、“女性性は、「伝統的」な性別役割分業と直結しており、逆に自己実現意欲が女性を伝統から解放する”といった単純な進化関係を示しているのでもない。この差異は彼女たちが結婚をどのようにイメージし、結婚に何を期待しているのかといった結婚に対する構え、つまりライフコースや生き方を創造していく上での結婚の位置付けの違いから生まれた相違として受け取られるべきものである。

表4 《女性自覚度》と結婚のメリット (%)

女性自覚度	← 強 →			有意水準
	I	II	III	
①幸せな家庭が持てる	56.1	47.4	28.8	p<.01
②経済的安定	30.8	21.6	42.6	p<.001
③世話人ができる	35.5	24.5	21.7	p<.001
④パートナーができる	65.6	70.2	66.7	

ただし数字は「結婚することにどういふメリットがありますか」という質問に対し、以下のそれぞれの項目に対し、①②④は「とてもそう思う」と答えた人の割合。③は「とてもそう思う」と「ややそう思う」に答えた人の割合の合計。①「幸せな家庭をもてる」、②「経済的に安定する」、③「身の回りの世話をしてくれる人ができる」、④「人生のよきパートナーが得られる」

このことは、彼女たちが具体的に結婚にどのようなメリットを見いだしているのかを検討することで明らかとなる。表4は、《女性としての自覚》の強弱によって、結婚に対するメリット意識がどのように異なるのかを示した数字だが、ここから《女性としての自覚》の強さは、「幸せな家庭が持てる」「経済的に安定し」「世話人ができる」といった結婚の外面的／機能的側面に着目させる傾向があるということがわかる。さらに、こうした結婚の位置付けの違いは、結婚相手への《期待》の違いとしても現れる(図表は省略)。《女性としての自覚》が強いと、結婚相手に対し、「年上である」「学歴が上である」「頼りになる」といった外的条件を重視する傾向が強くなるのである。これと対照的なのが《自己実現意欲》である。

《自己実現意欲》が高いと、女性は結婚に対し「パートナーができる」ことを、つまり精神的な側面をそのメリットとして着目する傾向が強くなる。もちろん、こうした傾向は、成績を統制した後にも残るものである。ところで、このように結婚観に差異がみられるからといって、これを、“愛情が豊かか打算的か”といったパーソナリティ上の差異がもたらすものとして解釈すべきではない。それとは逆に、いかにして自分の人生を充実させるかといったライフコース構想における結婚の位置づけ方の違いが、こうした差異を生むと考えるべきであろう。

表5 女性らしさ・女性自覚度・家事実施度の比較(相関係数表)

	女性自覚度	女性らしさ	家事実施度
自己実現意欲度	-.15	-.02	.12
結婚年令	.25	.19	.01
結婚相手への期待度	.18	.18	-.11
専業主婦志向	.15	.17	-.01
ロマンチック・ラブ信奉度	.10	.17	.03

では文化的イメージとしての女性性、すなわち《女性らしさ》は、女性の結婚への構えとどのような関係にあるのだろうか。表5は、《女性としての自覚》と《女性らしさ》そして《家事実施度》が結婚への構えとどのような関係にあるのか、その特徴をまとめたものである。これを見ると《女性らしさ》は基本的には先に述べた《女性としての自覚》と同じように、結婚への期待の高さと結び付くことを特徴とするが、二つの点でこれと微妙に異なっている。一つは、《女性らしさ》は《ロマンチック・ラブ・イデオロギー信奉度》と強く結び付いているという点である。<sup>43)</sup>彼女たちは、結婚の外的条件を重視する傍ら「純愛に憧れ」また「愛する人といられる」ことを結婚のメリットと考える傾向も他の女性より強いのである。二つめは、結婚に期待する内容の差である。《女性としての自覚》が「世話をしてくれる人ができる」といった結婚の保護・依存・安心の道具としての機能と強く結び付くのだとすれば、《女性らしさ》は、結婚相手に学歴など階層的意味合いの濃い項目を期待する傾向、つまり、いわゆるブルジョア型(三高)の結婚と強く結び付いている(数字省略)。先に《女性らしさ》と《経済的な豊かさ》との結び付きを指摘したが、ここから、《女性らしさ》を媒介として階層の再生産が「専業主婦」の再生産とリンクしている様子を見ることもできるだろう。

だが、ここで「再生産」という概念には注意が必要で

ある。ここで言う「再生産」とは、あくまで取捨選択のプロセス（否定の契機／外部変数）をへた後、結果として現れたものであって、決してなにがしかのマクロ主体による予定調和的な自己再生産や伝統の連続性を示しているのではない。このことは、《家事実施度》に着目するとよくわかる。《女性らしさ》や《女性としての自覚》の強さ、さらには専業主婦を希望する度合いは、専業主婦の役割＝内容、つまり《家事実施度》とはほとんど関連がみられない。《家事実施度》と結び付くのはむしろ《自己実現意欲》のほうで、専業主婦を希望する女性のほうが専業主婦「役割」に向けての予期的社会化はなされていないのである。こうした数字は、現代の女子学生の「保守化」といわれるものが、伝統への回帰とは似て異なるものであることを示している。彼女たちの求める専業主婦は、主婦役割を遂行するという機能的なモチベーションを示しているのではなく、「理想的な家族を演じる」こと、そしてさらには「贅沢な生活を享受する」こと、といった積極的・戦略的な内容をその中に含むものなのである。もっとも、ここで「戦略的」といったからといって、それは、経済階層的な位置に誘導され、また学業達成の低い位置に適応するために得られた女性性を媒介とするものであり、決して彼女たちの真の「自由」を意味しているわけではないのだが。

最後に、Ⅱ章全体のまとめに代えて、A節で検討した《家庭での社会化》の問題を考慮しつつ、「専業主婦」が形成されるパターンについて整理しておくことにしよう。ここには三つのパターンが想定できる。すなわち、①「家庭でのしつけ→女性的社会化→専業主婦」というパターン、②「教育での落ちこぼれ→女性への逃避（女だからという論理）→専業主婦」というパターン。そして③「消費と親和的な女性文化や階層文化→女性らしさ・女性的ハビトゥス→結婚の戦略的位置づけ→専業主婦」というパターンである。つまり、専業主婦は、上からの女性的社会化のみならず、「女性だから成績が悪くてもよい」といった形で業績競争からの逃避シェルターとして女性を利用することで消極的に求められる場合、消費社会との親和的なハビトゥスが、有利な結婚、あるいはより高いレベルの生活を求め、その結果積極的に求められる場合とがあるといえる。（こうしたつながりの背後には、B節で見た女性文化の構造が深くかかわっている）もちろん、ここで示したシステム連鎖は、あくまで多くのつながりのなかのひとつに過ぎないものであり、これは他のシステムや構造と相互に複雑に関連し合って成立していることを忘れるべきではない。たとえば、本調査でも男性の求める女性像が「素直でかわい

い」に集中し（58.1%）、彼らの結婚へのイメージが「身のまわりの世話をしてくれる人が出来る」（男34.4%女3.3%）に固着していることが明らかとなったが、こうした男性側のカセクシス構造（心理傾向）が女性らしさを身につけ結婚上昇を求めるという生き方・戦略に意味を与えるゲームのルールとして機能していることには十分注意しておく必要がある。

（越智康詞）

### Ⅲ. 自由記述を通して見たジェンダー構造

Ⅱ章では家庭性が形成される要因、あるいは女性内分화가生じるメカニズムが様々な角度から明らかにされた。しかし、現実の女性がどのような論理でそれぞれの選択行為をなすのかをより内在的なかたちで理解するには、彼女たちがジェンダー的に構造化された世界の中でどのように生きているのか、つまり、彼女たちがジェンダー関係の諸構造をどう観察・評価し、これとどのように関係しようとしているのかをより詳細に観察する必要がある。女性は、女性であるという状況や女性性として取り集められた品目の中に単に受動的に住まうわけではなく、これに特有の解釈をほどこしながら、積極的に関与し独自の道を切り開こうともしているのである。

本章の課題は、ジェンダー関係の諸構造に関する女性自身の「自由記述」の分析を通して、女性にとってジェンダー世界の再構成する作業を行うことである。もっとも、ここで扱うテーマは、「将来の夢」「女性に生まれて損した点／得した点」「男女観や結婚観の大学での変化とその原因」の三つであり、体系的な分析は望むべくもない。しかし、ここでの限られた分析は、Ⅱ章での家庭性形成の要因分析を行為者（女性）の観点からとらえなおすことに役立つばかりでなく、研究者がジェンダー構造を観察する際しばしば用いてきた分析枠組み、たとえば労働 vs. 家庭、依存 vs. 自律、権力者 vs. 弱者といった分析枠組みではとらえ切れない現実の姿を浮き彫りにし（A節、B節）、さらには大学組織におけるジェンダー・カリキュラムや、そのなかでのジェンダー意識のダイナミクスを明らかにすることにも役立つ（C節）。

#### A. 将来の夢の分析

女性のライフコースが多様化した現在、人生の重要な選択を前にした女子学生にとって「将来の夢」を抱くこと、将来の可能性を意識の内部で構築すること自体が一つのジェンダー的実践となっている。本節の課題は、女子学生の「将来の夢」について自由記述を分析すること

であるが、ここから、私たちは、彼女たちの将来構想が何によってどの程度枠づけられているのかのみならず、彼女たちが直面する様々な制約やジレンマをどのように対象化・分析し、さらには、乗り越えようとしているのかを知ることができる。

### 1 結婚に対する夢

女子学生の抱く夢を分類すると、そのうち大半が結婚に関する夢か自己実現に関する夢に分類できる。ここでは、まず結婚への夢を検討しよう。

結婚そのものがこれほど頻繁に「夢＝目的」とされること自体、興味深い現象であるが、これを単なる伝統の拘束とかロマンチックな虚偽として片付けてしまうべきではない。女性自身が結婚をどのようなものとして具体的にイメージし、これを位置づけているかを分析していくと、結婚への夢の内容は決して無邪気な空想などではなく、彼女が生きていく上での一つの実践的・戦略的な構築物であることがわかる。

実際、女子学生の結婚観の内容を分析・整理していくと、そこには「好きな人／良きパートナー」「(かわいい子どもに恵まれた)幸せな家庭」「経済的・精神的土台」という三つのカテゴリーが見いだせた。現代の女子学生は結婚を、単に愛の最終ゴールとしてのみならず、幸せな家庭生活あるいはよき父／母／子関係が演出される舞台、そして何不自由のない人生を確保する「保護シェルター」としても、これを位置づけている。<sup>44</sup>

- 「大好きな人と結婚して、素敵な家庭を作り、たくさん遊びにでかけること」(I大)
- 「若くして結婚し、はやく子供を生んで、『若い奥さんですね〜』と言われながら、子供と友達のように外で遊んであげる。二人の子供には、ベアルックを着せたりして、べったべったにかわいがるでしょう」(H大)
- 「幸せな家庭でぬくぬくと暮らしたい」(K大)
- 「家庭的な人と結婚して収入もある程度あるような生活」(K大)

しかも、こうしたイメージは決して絶対的・拘束的なものでもなければ、あらゆる女性が結婚をこうした三位一体化の統合的イメージでとらえているわけでもない。彼女たちの夢をその内容・要素の組み合わせに注意して分析していくと、理想の結婚のイメージは当の女性の理想とする人生設計や好みにしたがって適当に作りかえられていることがわかる。ライフサイクル構想や趣味・目的・価値意識に応じて、上の三つの要素のある特定の側面を殊更強調したり、不都合な側面は切り落とすがおもしろい部分は取っておくといった“つまみ食い”的な理想も珍しくない。彼女自身の価値や目的に応じて、性別役割分業(夫婦の役割演技)抜きの結婚、子ども(母子の役割演技)抜きの結婚、さらには奇妙な話だが、パート

ナー・夫そのものを必要としない結婚?の理想まで存在している。

- 「楽しい恋愛をすること。幸せな結婚をすること(家事は半々)」(B大)
- 「近い将来は若いうちに後悔しないようにおもいきりあそぶ。遠い将来はいい人と結婚する。夫と2人きりで暮らす」(K大)
- 「子ども3人と仲良く過ごす、旦那さんはいなくていいや…」(J大)
- 「やっぱり幸せな結婚をしたいです。とりあえず年2回の海外旅行はゆずれません。その程度の生活をしたいです」(H大)

もちろん、女性にとって結婚がこのようにライフコース上の他の目的・価値に合わせて構成されているという点は、新しい独創的な結婚観や“つまみぐい”な結婚観にのみ当てはまるわけではない。最もオーソドックスな、つまり「三位一体化」した「性別役割分業を基礎とした結婚」を求める場合にもこのことは当てはまる。これも、「気ままな人生」を送る、「おもいきりあそぶ」といった目的・欲望を実現するための前提・土台として、積極的・戦略的に求められているのである。<sup>45</sup>「専業主婦」という一見伝統的な選択を行う場合でも、その選択の理由や選択プロセスに着目することで彼女たちが全く新しい内実をもった結婚を選択していることがわかるだろう。

### 2 自己実現に対する夢

女子学生にとって、「自己実現」、あるいは「職に就き社会に参加する」ことも結婚に劣らず重要な夢となっている。しかし、これをいわゆる「労働」や「職業」への意欲としてまとめてしまうのは正確でない。彼女たちは職に就くことを求める場合でも、それを「キャリアにおける成功」「男性と対等なパワーや金銭の獲得」といった社会的かつ一般化された目標と結び付けることはほとんどなく、自己啓発、社会貢献、心的充足感など個人的・心理的な内容と結び付けてこれを求める場合がほとんどである。彼女たちにとってより根底にある目標は「自己実現」なのである。

- 「どんな職業についても、自分を向上させることのできる生活をしたい」(H大)
- 「もっと知識を身につけ、自分を磨きやりたい仕事に就きたい」(I大)
- 「世の中をよくしたい。そ—いうことに役立てるイシキをもって仕事をしたい」(E大)

このように「キャリア・地位」そのものよりも、「自己実現＝仕事の内容・意味」を重視することは、キャリアに残ることが女性にとって不利であることの構造的帰結(一種のあきらめ)であり、また、機能としても、進んで周辺労働市場に参加するなど、女性にとって不利な結果に結び付きやすいものであることは否定できない事実である。しかし、だからといってこうした意識を虚偽意

識に還元してしまふことはできない。自己実現といった個人的・主観的内容を重視することは、彼女たちにとって仕事（ある程度の勇気をもって）選び取られるべき可能性であり、なぜ仕事をするのかということへの反省・自覚を絶えず求められていることの帰結でもある。こうした反省・自覚は制度化された成功に絶えず駆り立てられるよう仕組まれた現在の職業構造（会社本位主義）そのものに揺らぎをかける可能性を含んだものであるとあってよい。<sup>46)</sup>

### 3 二つの夢の組み合わせ様式

「自己実現」への夢を典型的な男性役割（会社人間）に、「結婚」への夢を典型的な女性役割（専業主婦）に対応させて思考するならば、この二つを同時に求めることは矛盾を生み出すだろう。しかし、現実に女子学生はこの二つの夢を追い求めているし、それなりの答えを見いだしてもいる。それでは一体どのように、彼女たちはこれらの夢を組み合わせ、調和・妥協・解決を図っているのだろうか。ここでは、どの程度、固定的な職業構造や規範化された結婚形態に囚われ（解放され）ており、また、どのようにこの二つを妥協・統合しているかという観点から分類を行った。次の7つのパターンが見いだされた。

①自己実現をそのまま専業主婦役割に統合する方法。家庭を「築く」とか、「よい母親となる」「子どもの視点に戻って新しい世界を発見」といったように、それ自身を創造的なものと位置付けている。

②ライフコースを段階的に区切り時間的妥協を目指す方法。卒業したら「やりたい仕事」に就き、子どもが生まれたら「専業主婦になる」。あるいは「子どもの手がかからなくなったら」働く、というもので、これも基本的には伝統的な家庭を保持する方法だが、「結婚時期を延期する」とか、「家庭 vs, 仕事」を「子ども vs, 仕事」（M字就労型）に置き換える点で家庭イメージを変容させている。

③サイドワーク的に仕事をもつという方法。これも家庭中心を維持しながら自己実現を求める方法だが、その両立可能性は「バレーの先生」「作家」「ボランティア」「学問」「芸術」といった特殊な内容によって可能となっている。この場合、その活動内容は、組織に頼らず、しかも自己実現に直結するものであるという点が特徴的である。

④技術や知識を活かすことで、家庭と仕事の両立を図る方法。これは③の方法に近いが、家庭観が、先のM字型就労（子ども vs, 仕事）とセットになっている点、職業意識が明確で、しかも「企業のような大きな組織に束縛さ

れずに仕事をしたい」という内容重視の仕事観が強いのが特徴的である。

⑤家族とキャリアの両立を求める方法。これは妥協・工夫というより、力と努力によって欲しいものをすべて手に入れようとするスーパーウーマン的手法とでもいべきものである。スーパーウーマンになれない場合、「結婚できなくても別にいい」と結婚を従属的なものとして位置づけるケースが見られたが、これは、結婚への興味が薄いというよりも、家庭へのイメージが固定的で、家庭か仕事かという二者択一に囚われているがゆえに陥る結論といえるかもしれない。

⑥結婚からさまざまな意味・機能を取り除き、結婚と仕事とを両立させる方法。職業等により「男性に頼らなくても生きて行けるくらいに社会的に自立」した上で「結婚生活を送る」というようなケース。この場合、結婚を支えるのはもっぱら愛情（情緒的絆）だが、こうした近代主義的結婚観を抱く者は、むしろ例外的ケースといえる。

⑦規範的な結婚のイメージを仕事・自己実現と統合するという一種の弁証法的な解決。「作家」になって、パートナーと「共同で作業」をする、「だんなとおとうふ屋」をするといった夢が、こうした例として挙げられるだろう。

以上、女子学生は、それぞれ様々な方法でこの二つの夢を統合・妥協させているが、全体的に「自己実現」を「経済的自立」や「対等な関係に基づいた結婚」と結び付けるのではなく、「性別役割分業に基づく依存的関係」と両立させることを主眼とする、というのが主流であった。彼女たちの夢・目標は、研究者が作り上げてきた「経済的自立 vs 依存（保護）」「仕事 vs 家庭」といった「あれか／これか」の二項対立の論理の内部にはなく、むしろ、自己実現と〈女性性〉のある部分、特にはっきりとは自立しないでおくことによる利益とを「あれもこれも」手に入れるよう、様々な工夫を凝らしているのである。われわれは自立したふたりの「愛情」で結ばれた結婚が、理念としては語られやすいものであるにもかかわらず、目指されることが少ないのはなぜか、についてもう少し突っ込んで考察する必要がある。次節では「損／得」意識の自由記述を通し、この問題を追及していくことにしよう。

（越智康詞）

### B. 損／得意識を通して見たジェンダー構造

本節では、女性に生まれて「損をした点・得をした点」についての女子学生自身の「自由記述」を通して、

ジェンダー関係の諸構造を検討する。これにより、女子学生がジェンダー関係を現実にもどどのように経験し、またこれとどのようなかかわりを持っているのか、といった観点からもう一つのジェンダー世界を描くことができ、さらには、なぜ女子学生が女性であるがゆえに与えられる立場や役割を完全に放棄しようとするのか、といった問いへの一つの答えを見いだすこともできる。

### 1 女性に生まれて損をした点

まず、女子学生が女性に生まれて「損をした点」として挙げる内容を整理・分類しておこう。これはだいたい次の5つの項目にまとめることができた。

①女性に対する期待の低さ、差別意識、社会参加へのハンディキャップ、など女性の「社会的地位」に関連した意識。ここには「男より低く見られる」「責任ある仕事を任せられない」など直接的に差別的なまなざしや処遇に対する不満だけでなく、「やることを限定されるのでまるで能力がないかのようにでくやしい思いをする」といったように、女性に対する差別・抑圧がさらなる差別・抑圧の源泉になるといったシステム連鎖への洞察を含んだ意識も見られた。

②女性であるがゆえに課せられる社会的拘束に関連した意識。これは、女性だからということで課せられる特別のしつけ、保護のわずらわしさ、結婚を控えての品質管理による束縛といった直接的に家族内で与えられる規制に対する意識（cf.「礼儀をうるさく言われる」「夜、帰るのがおそいとおこるし…男の子とつきあうことに関してとてもうるさかった」）や、女性らしさに対する世間一般のまなざしの拘束性に対する意識の二通りがある（cf.「下品なことができない」「人目を気にして行動せざるを得ない」）。また、女子学生の中には、女性であることで与えられる規範・規制そのもの以上に、それらが近代社会・学校社会の基本的価値である業績主義・個性化原理に抵触するという理由からこれを問題視している者もいる。（cf.「あんまり我が強くしつかりしすぎていると“かわいくない女!!”とかいかかわれるところ」「個性的であったり自己主張することが本人にとって不利になりやすい」）。業績原理・個性化原理の中での価値、一様化された女性の理想像の双方の要求を高い水準で、しかも字義通りに達成しようとする彼女たちは、一種のダブルバインドの罠に入り込んでいるともいえよう。

③性別役割分業／女性が家事を行うことに対する不満。この意識は、男はソト、女はウチといった、性別、役割分業に基づいた結婚意識というよりも、家事役割を押し付けられた直接的経験に由来するものが多かった。（cf.「女だから料理ができないといけないと言われる」「家

の手伝いをさせられた」）。だが、結婚を性別役割分業＝家事役割と同一視する女性にとっては、結婚そのものが否定的な対象となる場合もある。（cf.「お手つだいさんになりそうでイヤ」「結婚すると人生終わり」）。

④女性のエロスの構成、性的存在様態に関する意識。女性の性が客体化され、外見で判断されることに不満をもつ者が多い。（cf.「顔かたちを問題にされる」）。これが否定的に評価されるのは、(1)拘束性・労働量の問題（cf.「キレイにしてないといけない（cf.脱毛）」）、(2)アイデンティティの問題（cf.「性的な対象としてしか見られない」）、(3)他の女性との比較にさらされるという問題（cf.「常に美人のほうがもてはやされる」「外見が美しい女性と比べられる」）、(4)内面重視のモラルと不協和だという問題（cf.「男は性格が良いともてるが、女はそういうわけにはいかない」）、(5)年令を気にしなければならないという問題（cf.「女の華は短い」「年をとると評価が下がる」）など、多くの問題と関連しているからである。セクシュアリティに関しては、「性的いやがらせ」「ちかん」など、直接的被害に由来するものが多数を占めている。

⑤生物学的・身体的なハンディに関する意識。「生理がある」といった身体的・現実的に味わう苦痛やめんどくささ、「体力的に男性より劣る」といった体力や能力に関する意識がこれである。だが、「女性特有のしつと深さ」といったパーソナリティや人間関係の特性に関する意識もここに含めてよいだろう。

以上見てきた通り、女子学生は、女性であるがゆえに様々な抑圧的状况を経験し、また、女性であるがゆえに求められる規範や社会的処遇に対し強い不満を抱いてもいる。確かに、最後に挙げた生物学的・身体的特性の意識は、男女の差異や格差を自然化する機能を持つが、これを除けば、彼女たちの不満は「男性中心主義」「押し付けられた役割」「客体化された性」といった言葉で研究者によって語られてきた支配／被支配の線引きとよく一致している。

しかし、ジェンダー構造は、こうした拘束的状况を作り出すばかりではない。私たちは、ここで構造の客観的に作動する側面・拘束性にのみ注意するのではなく、それらの構造の多面性、あるいは構造に対する個人の関係の複雑さに注意を払う必要がある。女性はジェンダー構造の内部に単に受動的に住まうわけではない。従って、たとえば字義通り受け取ればダブルバインドに入り込むよう仕組まれた価値の多元的構造も、適当に変形し、時と場合に応じて使い分けることで、幅広い人生を可能にする資源にしてしまうことも可能なのである。以下、女性に生まれて「得をした点」についての意識を検討する

が、ここからジェンダー関係の構造の多面性・現実の複雑さの一端をかいまみることができる。というのも女性は女性で「得をした点」として「損をした点」とほぼ同じ構造を取り上げているからである。

## 2 女性に生まれて得をした点

女子学生が女性に生まれて「得をした点」としてよく挙げるのは、「損をした点」と同じく、男性優位・男性支配という形で観察されてきた構造・規範と深く関連したものである。確かにそれらの利点の多くは、弱者の立場に適応することで抱くようになった欲望を弱者が消費するという消極的な利点であることは否定できない。(cf. 「責任をとらなくてよい」「待遇が甘い」)。しかし、女性の抱くこうした一見消極的な特権意識も、より注意して見ると、支配／被支配という文脈を越出る意味を持つものが少なくないことがわかる。「ちやほやされる」「みんながあまやかしてくれ、ぬくぬくした」といった特権は、単に強者・保護者の善意によって温情的に与えられた弱者・被保護者の特権というよりも、女性のエロ的な「魅力」に由来するものであり、それゆえこうした特権は、いわば女王様の特権の近いものとなっている。

さらに、女性は単に受動的に特権を与えられているだけではない。女性は、ジェンダー関係の諸構造を何かある別の目的（アイデンティティの確認という目的も含む）を実現するための資源として戦略的に利用している。(cf. 『できな〜い』などといって許される)「愛きょうをよくして、人にかわいがられる」「女の涙は時として誰にも有無を言わせない武器と化することができる」。特に、男性と女性のパーソナルな関係の中では、こうした「弱さの規範」を武器とする女性が上位に付くという逆転現象もめずらしくない。(cf. 「食事をおごってもらえたり、送ってくれたりしてもらえる」「ある程度わがままでも『カワイイ奴だ』って許してもらえる」「男の子が異様に甘く優しくしてくれる」)。

女性の置かれた状況より自由に対して開かれているとし、これを「得した点」として挙げる者も少なくない。(cf. 「おしゃれの幅が広い」「泣くことを変に思われない」「学歴にそれほどしぼられない」「男性と女性の両方ができる」「職業の選択に関して、“自分の好きなこと”というのを第一に考えられる(男の人は、社会的地位とか将来の安定性とかあるでしょ?)」)。こうした女性の視点からすると、出世や学歴や世間一般の常識にとらわれた男性は気の毒で、またこっけいに映ることさえあるようだ。

## 3 損得意識と女性内分化

上の記述においては、それぞれの「損／得」意識を

「どの女性が担っているのか」を考慮してこなかった。しかし、女性であることを持つ意味や機能は、決してあらゆる女性にとって同一であるわけではない。「常に美人がもてはやされる」ことが女性に生まれて「損をした点」として挙げられていることは紹介したが、出身階層や当人の学歴・学校歴も「女性としての経験」に大きく左右する要因となっている。以下では、対比を明確にするため、ごく一般的な二つの短期大学(J大, K大)と、いわゆる難関大学であるC女子大といった大学チャーターの大きく異なる大学の学生の「損得意識」の比較を通じて、「女性としての経験」あるいは「女性であることの意味」がいかに異なって現れるのかを示すことにしよう。

まず、「得をした点」について比較してみると、「大学卒業後の進路選択にあたって、男性に比べて自由な枠で考えられる」といった自由・選択の幅広さが利点として意識されるのはC大学の特徴である。これに対して、短期大学では、「大目に見てもらえる」「頼れる」といった依存・保護に関する事柄や、「勉強ができなくても少しくらいへいき」といった逃げ場としての意味が強調される傾向にある。もちろん、C女子大でも「とりあえず結婚すればあとはなんとかなる」と、一見、逃げ場として結婚が意識されている場合もあるが、他の可能性(選択性)を前提としたものであるという点で短大のそれとは意味が異なっている。

また、「損をした点」としてC女子大の学生は、「社会に出てはまだ男子と対等に扱ってもらえない」「自分のほうが優れていると思える場合でも、男性の方が優先される」といった不平等に関するものを挙げるのが特徴的だが、短期大学の学生の場合、「すぐ女だからと押さえ付けられる」「女というだけで教養がなくただ結婚の対象とみられていること」いったように、家父長制的な支配関係を思わせる回答が多いのが特徴的であった。つまり、短期大学の学生は、しばしば「女=家庭=無教養」という図式のもとで一律に理解され、家父長制的な女性役割の規範を強く押し付けられているのである。ここでは「結婚したらお手伝いさんみたいになりそうで、いや」という意識もみられたが、これは、彼女たちがいかに「女性であること」「女性にふさわしい役割」以外の選択肢を周りの人間によって奪われているかを示していると言える。もちろん、多様な選択肢をもつがゆえに出あう葛藤、エリート大学という場所に在籍しているがゆえに持つ疎外も少なくない。たとえば、彼女たちは、競争社会の論理の中で自己の身体をも評価するため、自分自身の「性／身体」から疎外される傾向が強くなる。「本能

的・身体的なものが邪魔になって、研究や仕事、人間であることに打ち込めない」。しかし、おおざっぱに言って、ここでの分析は次の点を示唆するものであるとあってよいだろう。すなわち、女性の多様化は女性の分化として理解されなければならない、しかもその分化とは、女性であるということが選択的に利用可能な資源として立ち現れこれを享受することの許された層と、伝統の規範の中で一様化された女性性の中に閉じ込められた層との分化となっているということ。

(越智康詞)

### C. ジェンダー文化の変容と両義性——異性観・結婚観を中心に——

多くの女性にとって大学生時代は就職や結婚を次第に身近なものとして捉え始める時期にあたる。さらに、入学後のさまざまな経験を通して、かの女たちの意識は劇的なまでに変貌する。なかでも異性との関係や結婚というイベントへの構え(対象選択のパターン)は、将来の職業展望や人生設計にもきわめて大きなインパクトを与える。あるいは逆に、将来の機会構造の見通しから〈逆算〉して、恋愛や結婚を戦略的に利用する場合も少なくない。

この節では、『大学に入学して、男女関係や結婚などについて、あなたの考え方はどのように変わりましたか。また、その原因(きっかけ)は何ですか。』という質問に対して、自由記述欄に書き留められたかの女たちの「声」をできるだけ正確に汲み取り、ジェンダー文化の変容と両義的な含意について検討を加える<sup>47)</sup>。

#### 1 変容する異性観——「赤い糸」の行方——

##### a 交際規範の弛緩

全般的にみて、異性に「身構える」ことが少なくなったという回答が目立つ。できるだけ多くの人と知り合い、自分に合った人を選ぶという生き方を好むようになる。これまでの頑なな態度がほぐれ、異性に対しても「自然に」ふるまえるようになったという。

・「結婚するまでに多くの男の人とつきあってみるのが、決して軽いという意味ではなくて大切なことなのだと感じました。高校の時は特別におつきあいしていた男の子もいなかったのですが、大学に入ってからおつきあひするひとができてなんとなく男女間に関するかたい考えがとれたような気がします。」(D大)

・「世の中には、いろいろな人が大勢いるのでたくさんの人と知り合いになって、つき合う人を決めたい。今までは1人の人に決めたらその人だけと思っていた。バイトを始めて、多くの人と会うようになったから。」(H大)

こうしてかの女たちは視野を広げていき、「恋愛市場」に参入していく。とはいえ、女性内の差異はきわめて大きい。これは、学校差にも表れている。たとえば、

K大とE大・C大の記述内容には際立った違いがある。前者の場合どちらかといえば「純愛」を相対化し、後者は依然として狭い交際範囲でよしとする「まじめな」女性が大半を占めるのである。

・「高校生までの男女関係とは違ってずいぶん大人になったと思う。それだけに真剣で反対に軽々しくもある。彼氏彼女を作るというところがまず違う。私はそういうのは嫌だし、彼というのは好きになってからできる結果だと思う。目的であってはならない。」(C大)

・「入学までは交際や結婚に漠然とした憧れを抱いていたようだが、女子大に入学したこと及びテニスサークルにおけるような軽いノリを目のあたりにして嫌悪を持つようになったことで、別に一人でもいい、あのようにイチャイチャしてはいたくないと考えるようになった。」(C大)

と同時に、同じ大学の中でも個人差は大きい。ひとつには、別学から共学の教育機関に進学したことが意識の変化をもたらす契機となる。男性に対する垣根が「共学」という組織編成形態を通じて取り払われていくのである。

・「高校は女子校だったのであまり男の人と話をしたことがなかったけれど、大学に入って男の人にもけっこう気軽に話せる存在であることがわかった。」(E大)

・「高校が女子校だったので、男性を異性だと意識しすぎていたが、共学の大学に入ってから、男性を友達として見られるようになった。男性を意識しすぎず、女性の友達と同様に話せるようになった。」(F大)

女子大であっても、共学大学とのサークル活動で肩肘を張らなくなった者もいる。

・「女子校を卒業して共学の大学のサークルに入り男友達ができたら前よりも広い視野でそういうことについて見られるようになった。」(D大)

したがって、「開放(解放)」の原因は、大学の伝統文化や組織形態だけではなく、もっとインフォーマルなレベルにも散在している。また、かの女たちが思春期を過ぎた地域の文化的特徴も部分的に関与しているかもしれない。いずれにしても、さまざまな制度的・組織的な契機を背景としながら、かの女たちは自らの異性観を大きく変容させているのである。

##### b 理想の異性像——「三高」から「内面」へ——

「男女関係=理想の異性像」という反応パターンは、多くの大学で確認された。共通するのは、いわゆる「三高」にこだわらずもっと男性の内面(誠実さ・優しさ等)を重視するようになったという点である。また、本音で語り合える偽りのない関係を理想化する傾向も強まる。きっかけは、自分自身の交際経験や友人とのコミュニケーションにあるようである。

・「現在結婚する相手に求められているのは三高だと言われているが、私はやさしさ、誠実さだと思う。これは男女関係についてもいえることである。そのきっかけは、最近そのことでつきあっていた人と別れたこと。」(B大)

- 「お互いに趣味があって、気軽に話せる人なら容姿は関係ないと思いはじめた。」(J大)
- 「外見にまったくこだわらなくなった。内面を重視するようになった。同級生で社会人になった人と話したりして変わった。」(K大)

しかし、C大・F大・D大にはこの種の回答がみられなかった。とくに、C大の回答内容は、他の大学と比べて非常に特異であった。「考え抜かれた」回答であるが、非常に「抽象的な」印象を受けた。しかし、一貫して「堅い」わけではない。交際している男性によって、かの女たちの回答内容はずいぶん異なる。

- 「今つきあっている人のおかげで、のんびりとした家族に入っても幸せだと感じられるようになる気がしてきた。また男女関係についてははじめてつき合った人の影響で女の人が一番の人であり続けるなら、浮気の1回や2回は別に気にしないという考えを持つようになった。」(C大)

特定の異性がいる場合、伝統的な男性を受け入れる「保守的な」回答がなされ、そうでない場合はじつに「理論的」である。男性とのコミュニケーションの「希薄さ」が「反動」をもたらすかのように、大学内での個人差が顕著である。

## 2 結婚観の変容と分化

### a 結婚の時期——二極化の進行——

結婚の時期については、どちらかと言えば、こだわりを弱める方向に動いた者が多い。

- 「結婚に関して少し現実的になった。→今よりも生活水準をおとしたりしたくない。相手の家族が良い人でなければ絶対に同居したくない。自分のわがままを50年近くきいてくれそうな人がいいらしい。いないけど。」(B大)
- 今までは結婚したら家庭に入りたいと思っていたけれど、結婚したからといって、男性の収入に頼るのでは全く自分自身というものがなくなってしまうような気がするし、自分の選んだ仕事を責任をもって続けたいと思った。(桐島洋子の影響)(D大)
- 「結婚は30才ぐらいまでにできればいいと思うようになった。せっかく大学まで行ったのだから、30才までは仕事を優先したいから。」(F大)
- 「結婚はそんなに早くしなくてもいいんじゃないかと思うようになった。結婚してからいろいろな問題はあるとし、私の人生が拘束されてしまうから。」(H大)
- 「高校生の時は早く結婚したいと思ったが、就職の決まった今、自分でかせいで自由に使って、遊んでからの方がいいと思ったから。」(K大)
- 「結婚は早くしたくない。また、好きなことをしてはたらい、遊んでからでないと、結婚したら損をした気持ちになって後悔する。」(K大)

理由はさまざまである。たとえば、まず自分らしさを確立し仕事を優先したいと考えるようになった者もいれば、〈結婚＝拘束〉という考えが頭をもたげ面倒臭さを覚えるに至った者もいる。また、K大に典型的なように、OL生活が比較的身近になってくると、「もっと遊んでから」と答える例も少なくない。なかでも、現在の

生活水準を落とさず私生活を楽しみたいという理由で結婚を躊躇し先送りする姿勢は、消費社会に生きるかの女たちの特有の心性を表していると言ってよい。

逆に、結婚へのこだわりを強めた者も決して少なくない。

- 『「結婚はしなくても…」から『してもいいし、したほうがいいのでは…』と思うようになった。きっかけは、男の子たちの考え方が、古い固定観念にしばられたものばかりではないと思うようになったから。』(B大)
- 「なるべく早く結婚したいと思うようになった。原因：一人暮らしをしているいろいろ大変な思いをしたため。」(E大)
- 「結婚についてちゃんと考えるようになった。社会に出て働き続けるのは大変だと思ったので。」(H大)
- 「結婚はやはりした方がいいと思うようになった。きっかけは、やりたい仕事に通じる学科に入れなかったので、一生仕事を続けていく自信がなくなったからです。」(I大)
- 「大学に入学してから結婚したいと思うようになりました。高校時代は自立した女性になり一生を終えようと思っていましたが、よく考えると最終的に女性の幸せは家庭をもつことだと思った。」(K大)

理由は、異性と接し家庭への憧れが芽生えたり、一人暮らしの大変さを痛感したり、社会に出て働くのは大変だと思ったりしたことなどである。また、「やりたい仕事に通じる学科に入れなかったので、一生仕事を続けていく自信がなくなったから」という説明は、「逃げ場」としての結婚という消極的な位置づけが行われていることを示唆している。とりわけ、「選抜性」の低い大学・短大（あるいは、第二次労働市場に列なる学歴ルート）の女性にこうした理由づけが目立つ。もちろん、それはかの女たち自身にとって積極的な意味をもっているという点で両義的なものではあるが。

また、次の二つの例は、仕事と結婚（家庭）との関係について対照的な方向を示している。後者の場合、「両立型」の「すてきな女性たち」との出会いがかの女を勇気づけたようである。

- 「特に変わりはありませんが、周りの人が女性の自立ということに熱心なので驚いている。『家庭と仕事の両立』をする能力は私にはないと思うし、男性と共に社会の中で仕事をしていくなら生半可な気持ちではやれないと思うので、仕事をやるつもりなら結婚はしない。これは昔から考えていることです。」(C大)
- 「結婚しても仕事を続けようかと思ったこと。結婚しても夫婦別姓もいいなと思ったこと。原因はそのように働くすてきな女性たちにめぐりあえたこと（アルバイト先など）。」(B大)

### b 「恋愛＝結婚」図式の崩壊

結婚と恋愛を別物として捉えるようになったとする回答が大部分を占めた。

- 「恋愛即結婚という考え方をやめた（結婚を考えながらつきあうこと。）つき合っていた人と別れた時、自分のせいで就職先を限定されたとのしられたから。」(F大)
- 「恋愛と結婚は違うとわかった。←まわりの夫婦をみていて。←結婚には生活に対する責任、ルールが必要になる。」(J大)

これは、上の異性観の特徴と表裏をなす回答である。さまざまな恋愛を経験し、結婚とは峻別して考える「したたかさ」を持つようになった。これは、「恋愛=結婚」という仕組みから自由になったことを意味しているわけではない。むしろ「形式」が変わっただけである。男性への依存性はそのままに、「おいしい結婚」を追い求める。仕事を通じた自己実現よりももっと「自由」で消費的な結婚がかの女たちの理想なのかもしれない。そうした自己限定のプロセス（あるいは、積極的・自発的選択のプロセス）が背後に横たわっているのである。ここにも、かの女たちにとっての〈女性性〉の両義性とパラドックスを読み取ることができる。

### 3 学問は実践に影響するか？

最後に、かの女たちの生き方に影響を及ぼした要因として、学問上の知識を挙げておかなければならない。発達心理学は母性信仰を強め、女性学はそれを疑問視させる。たしかに、特定の少数者にはあるが、性別役割分業観をも大きく変える可能性をもっている。とくに、C大のある層には、「フェミニズム」の言説が浸透しており、かの女たちの抽象的な生き方を支えているかのようである。

- 「子どもができたら自らの手で育児しようと思うようになった。←発達心理学の影響（前は家事育児は半々で、保育園利用を考えていた。）」（A大）
- 「昔は男女関係にしても結婚にしても現実というもの全くわかっていなかったの、非常に強い憧れを持っていたし、夢もあったけれど、大学に入学してから女性史や社会学でのフェミニズムの講義を受けたり男女間のいろいろな事や結婚の実情などについて本や人の話を聞いたりして、現実には甘くないと考え直すようになり、たとえば結婚について以前は好きな人と一生幸せにいられると思っていたけれど、最近一人の人をずっと好きでなんていられるわけが、など結構悲観的になりつつあるような気がします。」（C大）
- 「以前までは早く結婚して専業主婦になろうと思っていましたが、最近仕事をしようと思いだしました。周囲の友人の影響と授業の『婦人問題』で学んだことからせいか大学に入ったのだから、それを生かして自己実現を果たしたいと思いだしたためです。」（C大）
- 「結婚しても仕事を続けていきたいと高校卒業するまでずっと思っていた。でも大学に入り、心理学等で幼児にとって母親の存在がいかに大切かということを知り、仕事をやめても子どものそばにいてあげたいと思いはじめた。昔はそうすることは子どものために自分の人生を犠牲にすることだと感じていたが、今は女性の役割として自然に受けとめられるようになった。」（H大）

いずれにせよ、学問は自明視された世界を括弧に入れる作業に貢献もするし、現実の信仰を強める働きもする。もちろん、〈理論〉との接触だけが独自の影響を与えるかどうかはわからないが、意識を変革する可能性を少なからず孕んでいると言ってよい。さらに、実際の異性関係や日常生活の中から〈女性の特長〉を確信することもあるし、〈女性の可能性〉に目覚めることもある（引用省略）。学問的な知識は、こうした日常的な知識と相互

に影響しあいながら、大きくかの女たちの文化を変容させていくのである。

### 4 〈カレッジ・インパクト〉の可能性と限界

女子学生たちの率直な記述は、多くの示唆を与えてくれる。それは、①大学生活を通じて、ジェンダー文化（とくに、対象選択への構え）がきわめて大きな変貌を遂げること、②異性観に関する変化の方向には一定の共通性がみられるが、結婚へのこだわりと意味づけの点では分極化する傾向がみられること、③変化は異性や同性の同輩・先輩とのインフォーマルなコミュニケーションや学問など制度化された知識との接触など多方面に及んでいること、の3点である。かの女たちの意識・行動は、究極のゴールへと収斂していくわけではない。広義の〈カレッジ・インパクト〉が作用することによって、さまざまな生き方が選取られることになる。〈女性内分化〉はこの時期劇的なまでに進行する。と同時に、かなりの部分は旧来の〈自立したキャリア・ウーマン〉や〈抑圧された伝統志向の女性〉ではない。むしろ、〈女性性〉を戦略的に利用する生き方が伸びてきている。「ロマンチック・ラブは『父の権力』から娘を解放するかもしれないが、その代わり『夫の権力』のもとへと、女をすすんで従属させる。恋愛の狂おしいエネルギーは、『父の支配』の重力圏からの遠心力と、『夫の支配』のもとへの自発的な自己放棄とに向けられる<sup>18)</sup>」という説明はたしかに真理の一面をついている。しかし、かの女たち自身の意味づけとそれが女性の位置の決定に果たす役割を見落としてはならない。その際、〈分化〉と〈両義性〉という概念装置が現実を理解する一助となるに違いない。本節は、そうしたプロジェクトのささやかな試みである。

（菊地栄治）

## IV 結びにかえて

現在、女性を巡る言説は極めて錯綜した状態にある。一方で女性の時代、女性の社会進出と、その「変化」の面が強調されるかと思えば、他方では女性の「保守性」が問題となる。また、「変化」や「保守性」を示す数字は、様々な社会問題と結び付けて論議される。たとえば少産化傾向を示す統計数字は、将来の危機を示す数字とされ、その原因を女性の社会進出と直結させる言説が生み出されるかと思えば、他方で、これを女性の社会に対する異議申し立てであるとして美化し、その数字を社会批判の道具とする言説も少なくない。消費社会に「遊ぶ」女性に対しても評価は二分される。一方でそれは、

わがまま花子、平成無責任ガールなどと豊かさの生み出した徒花として揶揄されると思えば、ポストモダンの言説に悪乗りして、それこそが悪しき男根中心主義を脱構築する唯一の解決法とばかりに賛美される。これらの言説に共通するのは、男性／女性、体制／反体制、拘束／解放といったなにがしかの二分法への固執であり、そしてなによりも、原因と結果の単純なそして道徳的な結び付けである。こうして、女性を取り巻く言説は一種の“物語り”となって流通するようになるが、ここで忘れられているものは現実の女性の多様な「声」である。ここで私たちは、女性の中にも、女性の声を重視すると自認するフェミニズムに対して、違和感を抱く者が少なくないという現実からも目をそらすべきではないだろう。

49) 客観主義の立場から“進んだ意識／遅れた意識”の二項対立の彼女たちを分類してしまう前に、これらの声の多様性を多様なまま掬い取る工夫が必要なのではないだろうか。本稿は、こうした問題意識から「女性内分化」、そして「女性であることの両義性」という視角を導入し女子学生文化の観察を行った。もちろん、ここで取り上げた女性は、「女子大学生」という女性全体からみればごく限られた範囲の特殊な女性であり、この視点は非進学者も含めたさらに幅広い層の女性やライフコースの別の段階にある女性にまで射程を広げて検討される必要がある。そうでなければ、これはまた一面的な理解に止どまってしまっただろう。このように残された課題はあまりにも多い。しかし、本稿での分析が新たなジェンダー研究の発展のきっかけとなれば幸いである。

(越智康詞)

## 註

- 1) 上野は、家父長制を単にイデオロギー的な存在としてではなく、「再生産」を管理する物質的基盤として取り上げ、この概念を洗練し説明力を向上させた。上野千鶴子『家父制と資本制』岩波書店1990年
- 2) コンネルは、家父長制パラダイムに基づく従来のフェミニズム理論を、本質主義、カテゴリー主義、再生産などの点で批判し、ジェンダー構造をそれぞれ別々の軌道を描く三つの構造（権力、性別役割分業、カセクシス）に分け、また、実践と構造の二重性理論を使ってジェンダー理論を構想した。現代社会のジェンダー構造を分析するには、こうした構造を多元的にとらえ、また、実践の局面を重視する理論構築は極めて重要であると思われる。  
R. W. Connell, "Gender and Power : Society, the Person and Sexual Politics" ,Polity Press, 1987
- 3) こう述べるからといって、決して教育は理想視できるわけではない。それは、質的差異を量的（学歴・能力の）差異に変換することで不平等を見えなくしているし、Ⅱ章D節において述べるように、量的差異を質的差異に再び転化させることで不平等な
- トラックを作り出すものでもある。だが、教育システムの基本原理は、あくまで学力・能力に応じた平等な処遇なのである。学校におけるセクシズム研究が示すのは、確かに平等の不徹底であるが、我々の視点からすると、そうした学校でのセクシズムを探究する研究がさかんであること自体、教育における平等コードの存在を証明するものに他ならない。
- 4) 現在でももちろん家父長制を「性に基づいて、権力が男性に優位に配分され、かつ役割が固定的に配分されるような関係を規範の総体」といったように定義することはできる。瀬地山角「家父長制をめぐって」『フェミニズム論争』江原由美子編 勁草書房 1990年。しかし、そうすると、この概念は現実の多様性・曖昧さとは無関係に成立する概念、現実のジェンダー構造の記述力を喪失した概念になるにもかかわらず、「家父長制のたくらみ」（上野 上掲書）といった批判的意味作用のみが残ることになる。これが「男性支配批判というフェミニズム」を支える理論前提とならないという保障はない。小浜逸郎『男はどこにいますのか』草思社 1990年
- 5) システム論の視点を取り入れたものとして、織田元子『システム論とフェミニズム』勁草書房 1990年。本質主義のドグマ性、主体と社会構造の二元論といったラディカル・フェミニズムの問題点を指摘し、その理論の革新性を拾いあげるべく、これを実践概念を中心に再生させた論考として、江原由美子『ラディカル・フェミニズム再興』勁草書房 1991年。ただし、本稿ではシステムを、自己再生産する予定調和的なマクロ主体としてではなく、偶然発生した連鎖・関係の体系であり、個々の要素からは考えられない創発特性を持ち、かつまた個々人の実践によって変化可能なものととらえる。また、実践を重視する場合、その実践の権力作用に着目するか、それらのつながり（システム連鎖）を重視するかの二通りがあるが、ここでは、後者の局面に着目する。こうしたシステムのとらえ方としては、たとえば、黒石普『システム社会学 ——大キサの知——』ハーベスト社 リベラ・シリーズ2 1991年。
- 6) この視点からすると、たとえば総合職と一般職の線引きは、女性の内部に発生しつつあった分化を追認し、これを可視化・制度化するものであったことになる。これはまた、曖昧な領域を許さない「あれか／これか」の論理を現実にも押し付けるものとなるかもしれない。
- 7) たとえば、1990年に総理府が行なった調査によれば、「男は仕事、女は家庭」の考え方に「同感しない方」と答えた割合は、男性が34.0%だったのに対して、女性の場合には43.2%に達している（総理府広報室編『月刊世論調査』1991年3月号）。同様な事実は、以下の報告書でも指摘されている（東京都生活文化局『若い世代の男女平等に関する調査』1988年）。
- 8) この種の認識枠組は、〈フェミニスト〉が運動の出発点として仮定してきたが、とりわけ、ラディカル・フェミニズムの思潮に最も鮮明にみられる。たとえば、S. ファイアストーン（林 弘子訳）『性の弁証法』評論社、1980年（1970）。カテゴリー理論の批判については、R. W. Connell, opcitを参照。
- 9) 雇用職業総合研究所『女子労働の新時代—キャッチ・アップを越えて』東京大学出版会、1987年。
- 10) 総理府の1990年調査のデータ（前出）を仔細に検討すると、30～40歳代の女性に較べて、20歳代の女性の場合に（「男は仕事、女は家庭」の考え方に）「同感する方」または「同感しない方」と回答する者がそれぞれ1割程度多くみられる（総理府広報室、前掲書、表2）。
- 11) 女性というこれまでともすれば一枚岩として扱われがちであった集団の内部に一種の多元的（非一貫的）階層秩序が成立している状況（これを〈女性内階層〉という）を認めることを議論の出発点とする。そのうえで、各階層が一定の社会的・歴史的な契機によって分化していくというダイナミクスが存在している

- ことを重視する視点である。この〈女性内分化〉の態様とそのダイナミクスを明らかにすることによって、〈同性の連帯〉を切り崩す社会的・歴史的な要因を探っていくことも可能になる。なお、いささかごちない表現ではあるが、従来の認識枠組との対照を際立たせるために、ここでは〈女性内分化〉という言葉を使用している。
- 12) いくつかの活動・態度に関する質問項目をもとに、男女別の集計を行い、男女の文化的な特徴をあとづけることも意味のある作業であるが、もう一方で、社会的に構築された〈女性〉または〈女性らしさ〉をどのように受け入れているかを探っていくという課題がある。もちろん、この種のカテゴリーを括弧に入れることを〈学習〉した対象者もあり、次善の策の域を出ない。しかしながら、かの女たち自身がどのように〈女性性〉を受け容れているかを示すおおよその手がかりとはなる。
  - 13) 資料は割愛するが、今度生まれるとしたらどちらの性として生まれるかという〈異性化願望〉を強く抱く女性が少ないのも上位の経済階層である。
  - 14) 「母親の就労」と「女性らしさの自己評価」との関連は、 $p < .001$ の水準で有意だった( $\chi^2=15.07$ ,  $df=2$ )。母親が就労している場合、「女性らしさ=1」の割合は19.7%であるのに対して、非就労の場合27.2%を数えた。
  - 15) 本人の家事実施度が最も低い「Ⅲ」が占める者の割合は、父親の家事実施度が低い層から順に、35.4%→31.0%→24.2%→18.4%となっている( $\chi^2=18.66$ ,  $p=.005$ )。
  - 16) 母親が就労している場合、「専業主婦型」を希望する者の割合は20.9%にとどまるが、就労していない場合には31.0%に及んでいる。逆に、「両立型」は12.0%少なくなっている。 $(\chi^2=16.37$ ,  $df=3$ ,  $p=.001)$ 。
  - 17) ここでいう「女性文化」とは、調査の対象とした女子学生のもつ行動様式や性向・嗜好のことであって、女性すべてに共通するような文化や、歴史的に女性にだけ継承された文化を念頭に置いているわけではない。またここで見られる傾向を、同年齢のコーホートの特性とすることもできないだろう。その意味ではあくまでも「現代女子大学生文化」である。とはいえ「文化」はあまりに広い領域を示す概念である。ここでの調査項目も、100近くの項目を作成したのち、そこから選択されたものだが、女性文化のダイナミズムが、いろいろなレベルにおいて非常に複雑に絡まりあっているとすれば、ここで分析されるものが「現代女子学生文化」であるとしても、それを手掛かりに女性文化の構造を分析するという探索的な目的からすると、それをひとまず「女性文化」と呼んでも差し支えないように思われる。
  - 18) 例えば、SEVENTEEN 特別編集『女の告白書』集英社、1990年、は現代の女子中高生が呼吸している文化のヴィヴィッドな資料である。
  - 19) P. ウィリス、熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房、1985年、は、労働者階級の子どもが、なぜ自らすすんで抑圧された地位を選び取るかに関して、文化の積極的な役割を論じている。だが、もちろん、女性文化を労働者階級の文化とのアナロジーでとらえることは避けなくてはならない。女性文化には固有の構造がある。
  - 20) これらの項目のうち、「心霊現象」を除けば、男子学生の回答との間に有意な差が確認された。したがって「心霊現象」を女性文化とするわけにはいかないが、ここでは「星座・血液型」「丸文字」の特性を際立たせるために分析に加えた。なお、肯定的回答率が30%程度のものであることから、本節での結論はそれを考慮した留保が必要である。
  - 21) 「愛称」に代表されるのは、女性文化における親愛的友人関係であるが、本稿ではこのテーマは割愛する。
  - 22) ファンシー・グッズやキャラクター・グッズについては、前田由紀「〈少女〉感覚と女らしさのゆくえーかわいらしさの社会心理」高橋勇悦・藤村正之編『青年文化の聖・俗・遊』恒星社厚生閣、1990年。
  - 23) 消費性の項目のうち、「流行で影響」「ファンシー・グッズ」「インテリア」は1~2%水準で、「花の名前」は5%水準で、経済的豊かさとの有意な関連が見られる(他の項目では見られない)。
  - 24) 「家庭性(domesticity: 翻訳では「家内性」)という概念については、A. オークレー、佐藤和枝・渡辺潤訳『家事の社会学』松籟社、1980年。
  - 25) こうした「超自然的」あるいは非正統的シンボル体系が女性文化とどのような関係をもっているかについては、運勢や手相・相性などの占いや、おまじないや迷信、縁起をかつぐこと、願かけ・個人的儀式(cult)なども含めてまた別のかたちで考察すべきであるので、ここでの分析からは除外する。
  - 26) 「一般に、女性・男性にとって次のようなことはどのくらい必要だと思いますか。」に3段階で回答。
  - 27) 「あなたが男性との交際で相手に期待することは何ですか。」として「デートのコースや場所を決める」や「ときどきプレゼントを贈ってくれる」など6項目に4段階で回答。
  - 28) モデルとしての母親の影響については、宮島喬・田中祐子「女子高校生生の進学希望と家族的諸条件」『お茶の水女子大学女性文化資料館報』5号、1984年、で示唆されている。
  - 29) ここで取り上げた項目を得点化し総合の尺度として相関を調べると、消費性とおしゃれ指向(洋服代を除く)は.438、消費性と洋服代とは.296と、個別の項目間の相関値よりも高くなる。しかし、家庭性と家事実施とは、マイナスの値もあるために、.046の低い相関となる。一方、家庭性は身の回りの配慮と.421の相関で、こちらはかなり高い値となる。また、オブジェ愛好と女性的社会化とは、.216で、こちらも相関値としてはほとんどの個別項目よりも高くなる。
  - 30) この語は本来昆虫などが自らと別のものに自らを似せる(あるいはもともと似たもの同士として存在している)「擬態(mimicry; mimétisme)」に対して用いられる。記号論的な表現をするなら、類似によるシニフィアンの連鎖ということになる。
  - 31) 厚生省「人口動態統計」(1990年9月)。1989年9月より1年間における統計結果。
  - 32) 総理府調査(1990年9月)、総理府広報室編 前掲書
  - 33) この点は第Ⅲ章の自由記述の分析でさらに検討する。
  - 34) 「遅いグループ」には《あまり結婚したくない》と答えた10%が含まれている。晩婚傾向と非婚傾向は定義上異なるが、実際には《あまり結婚したくない》が《結婚しなくてもいい》と近い意味を持っていることも考えられる。また、女子学生という年齢時期を考慮すると《あまり結婚したくない》ということが文字通りの意味にとることができない場合もあり、意味の重なりを考え、今回の分析では遅いグループに算入し分析を行った。
  - 35) 結婚時期と(「早いグループ」と「遅いグループ」と《仕事とすじで頑張りたい》《出世の見込みがあること》)について(それぞれ「とてもあてはまる」+「ややあてはまる」の合計)クロス表でみると、それぞれについて「早いグループ」:「遅いグループ」=7.1%:38.9%、「早いグループ」:「遅いグループ」=37.4%:45.4%となっている。全体的には「早いグループ」より「遅いグループ」のほうが職業志向の強さを示している。
  - 36) 《出世の見込みがあること》という表現は、バリバリ働くという現代社会における男性の働き方をイメージさせ、抵抗を感じる者もいると思われる。本調査ではとりあえず現在の業績主義的社会における「出世」ということばの範囲をそのまま用いることにした。
  - 37) 本調査では保母・小中高教員、カウンセラー他、司書・学芸員

- の合計では55.1%、これに新聞・編集、放送・アナウンサー、作家・翻訳家他を含めると専門的・技術的職業従事者希望は全体の69.3%となっている。ここでの分析に関してはカテゴリー別に人数の多い順から第4位までを対象とした。
- 38) 《仕事ひとすじで頑張りたい》については肯定派が約17%、否定派が約83%であることから、「人生を仕事にかける」といった意味での業績志向は強くない。
- 39) 性別役割分業観（性別役割分業観はある意味では男女観を、また家庭観や職業観をあらわしているが、ここでは職業をめぐるライフコースパターンの指標として捉えることにする。）と結婚の時期についてみると、キャリア志向の者ほど結婚の時期を遅く考えていることがわかる。（表省略）これは現在の雇用制度では就労の中断はキャリアアップにとって致命的である、という現実的な要因が強く働いているからであろう。
- 40) 後に本調査の自由記述の分析でもみるように、「女性らしさ」や「女性性」が異性観・結婚観だけでなく職業観や人生観にまで入り込んでおり、公的領域と私的領域を分ける代理指標になっている。
- 41) 本節で使用する指標の説明をしておこう。《女性自覚度》：「女なのだからそれほどいい大学をめざさなくてもいいと思った」「成績が悪くても『自分は女なのだからいいや』と思った」「『男子にはかなわないなあ』と思った」「女性に合った仕事をしたい」について4段階の回答を得点化しその合計で得られた得点。《家事実施度》：「掃除機をかける」「トイレや浴槽の掃除をする」「食事をつくる」「食事のあとかたづけをする」「洗濯をする」について上と同じ要領で作成された指標。《自己実現意欲》：「人生で自分の能力を生かすことが大切」「仕事を通じて自己実現をはかりたい」「就職はやりたい仕事ができることを重視する」について上と同じ要領で作成された指標。《ロマンチック・ラブ信奉度》：「純愛にあこがれる」「結婚のメリットは愛する人といっしょにいられること」「結婚のメリットは精神的な支えができること」「結婚のメリットはパートナーができること」について上の要領で作成された指標。
- 42) むしろ、成績が《自己実現意欲》に影響する程度（量的差異）は男性のほうが大きい。女性であることは、成績が直接アイデンティティや将来展望にたいして与える衝撃のバッファーとして機能しているのである。
- 43) 学歴の構造がその秘密を握っているように思われる。というのも、学歴は能力やまじめさなどの個人的なパーソナリティ特性と、将来の経済的安定の双方を同時に表示するため、当人の内面重視と将来の安定の確保という二つの目標を調和させるのである。
- 44) これを、ロマンチック・ラブと結婚への打算性が矛盾なく統合されていることを示す事実として見ることもできるが、むしろ、別々の要素が統合されているとみるこの視点こそ個性を愛することが人を愛することを意味する特殊西欧的なものだといえよう。
- 45) 「遊び」という要素は女性の晩婚化と結婚重視との両方を説明するものである。
- 46) 男子学生は、その夢を『「大草原の小さな家」で2人仲良く暮らすこと』『「Wind Surfin'」で湘南一速い男となること』『大物になる。歴史に名を残す』といったように、やや空想的にしか語れない。これは彼らの主体性が学歴主義や会社本位主義によって“何を選択するか”から“どの程度頑張るか”に縮減されていることと関連があるように思われる。「会社本位主義」という概念は、たとえば奥村宏『会社本位主義は崩れるか』岩波新書1992を参照。
- 47) 「変化なし」と回答した割合には、大学によってかなりの差がみられた。たとえばB大では10.0%にとどまったが、E大では34.8%に及んだ。
- 48) 上野千鶴子 前掲書 58頁。
- 49) 本調査でも4割を越える女性が、「フェミニズムはなんとなく嫌いだ」に“YES”と答えている。